

---

# 聖なる夜は君と・・・

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖なる夜は君と・・・

### 【Nコード】

N2403B

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

聖なる夜に大切な人と過ごしたい。それはだれでも思っているはずで。その日、毛利蘭は今年と一緒に祝えない彼のことを思い、空を見上げていた……。原作24巻ごろが元となっています。まだ、園子&京極さんが恋人となっていない時期の話。コナン小説リングに投稿させていただいたものの、改訂版となります。脱稿と、行変換ぐらいだとは思っているのですが（苦笑）読みやすいようにするつもりです。よろしく願いします。

12月24日、クリスマス・イブ。

その日はイエス・キリストがこの世に誕生した前夜である。

町中、いたるところに華やかな音楽、キラキラ光るイルミネーションに包まれて、幻想的なイメージをそそられる。

子供たちはそりに乗ってやってくるひげもじやのサンタクロースを待ち焦がれ、恋人たちは甘い甘いひと時を送っている。

きつと、誰にとっても特別な日。

『それなのに・・・アイツは来ない。』

リビングで鐘打つ深夜11時を知らせる音色を聞きながら、その少女、毛利蘭は自室に籠り、ふうつと深い吐息を一つだけ零した。今日は園子家でクリスマスパーティーだった。いつものように、コナンと2人で参加して。小五郎は探偵仲間と集まって徹マンするとか何だと言って、早くから家を出ていた。

思ったとおり鈴木家のパーティーは、たいへん豪華で、著名な政治家やどこかの財閥の御曹司、芸能人、作家、スポーツ選手などが一同に顔をそろえていた。・・・そう、それはそれで楽しかった。だけど、なんか物足りないような気がして・・・。

それは目の前のあの二人を見てしまったからだろうか。再会を喜びあう、一組のカップルのドラマみたいな一つのシーンを。

蘭はあの瞬間の煌びやかな大広間の中で一際目立っていたお姫様と白く輝いた道着を着込んだ和装の王子　その二人の主人公のワンシーンを目蓋の裏に映そうと、ゆっくりと瞳を閉じた。

あの、二時間前のウソみたいなドラマティックな出来事をまるで自分と行方の知れない幼馴染に重ね合わせようともするかのよう  
に。

## 1（後書き）

全部読みやすく替えてみました！。

6時から行われていた毎年恒例の鈴木邸のクリスマスパーティーも既に終盤に差し掛かり、辺りには酒を飲みすぎて、頭の中から爪先まで真っ赤にさせた人、帰り支度を始める人など少しずつ出始めてきたころだった。

「はああ・・・」

胸元を大胆に開けて、太股を露にした真っ赤なドレスに、同じ色のバラの刺繍がレースで編みこまれたショールを羽織り、化粧もゴージャスに決めていた園子は憂鬱そうにテーブルに突っ伏した。

「こーんな服とメイクで男を誘おうとしても所詮無理ってコトよね。大体、鈴木財閥の開いたパーティーで主役のお嬢様を差し置いて、その友達を誘惑するって何事？？大体蘭にはねえ、新一くんっていう、心に決めたダンナ様がいるのよ。来る人来る人、どうしてみんな蘭に向かって、『さすが鈴木財閥のご令嬢だ』とか『お美しくなられて・・・』とか言うわけ？鈴木財閥ご令嬢はアタシだっての！」

「園子姉ちゃんの服装が、キャバクラ嬢にしか見えないからじゃないの？」

ぼそり、とコナンが小さい声で呟くと、

「何ですって!？」

案の定、バチンツと鉄拳が彼の頭に鋭く直撃した。

「イテテテ・・・」

「ばかねえ・・・」

蘭はそう苦笑しながら、彼の頭をヨシヨシと労わるように撫でてる。

彼女のドレスは控えめな紺色で、胸元の銀のペンダントが印象的だ。園子が数着あるドレスを貸してくれると言った厚意を柔らかく遠慮して自分の家から持ってきたもの。そういう気遣いは彼女は好きではないからだ。なのに、確かに彼女がこのパーティー会場に姿

を現したときからこういうアプローチが後を絶たない。もちろん、その横で不機嫌になるのは園子だけとは限らず。

「あのねえ・・・アイツとはそんな関係じゃないってば」

真っ赤になりながら、蘭は両手を顔の前で2、3度振った。

「それに私のことはいいの、京極さんとはどうなってるのよ。冬季大会のときに誘ったんじゃないの？このパーティ」

「・・・」

その言葉に、園子の言葉がみるみるうちに曇っていく。

「・・・園子？」

親友のただ事ならぬ様子に、蘭は訝しげに彼女の顔を覗き込んだ。  
「ええ、そのつもりだったんだけど。何か次の大会の準備で忙しそうだったから、誘えなかった・・・。まだ私たち、恋人同士でもないし。あまり無理に言えなくて・・・。それにほら、彼、クリスマスみたいな外国行事、苦手そうでしょ？完璧な日本男児っぽいイメージじゃない。だから余計に・・・ね。断られるのも惨めだから・・・」

「・・・園子」

「だから・・・イブくらいは素敵な夜を楽しみたいな、と思って気合入れてこんな格好してきたんだけどさ・・・。空回りだったみたい・・・。私、疲れたから、もう寝よっかな・・・」

かったるそうに大きく伸びをする。そして、思い出したように目を大きく見開くと、二人の方に視線を送った。

「ああ、蘭。そのナマガキつれて、私の部屋来なさいよ。いいビデオがあるんだ・・・めっちゃくちゃラブロマンスvv」

園子は空笑いをしながら、座っていた席を立ち、エントランスに続く扉に向かおうとしたそのとき・・・。

ガチャ・・・キイ・・・

突然、彼女が向かおうとしていたその扉が重く音を立てて開かれ

る。

そして、そこに現れたのは  
鈴木園子にとってのたった一人の白馬の王子様だった。

そう、彼の名は

「真・・・さん」

園子は、目の前の出来事が信じられず、周りから見れば半ば放心状態で立ち尽くしていた。瞬きするのも忘れるくらい、彼を凝視したままその視線を離すことができなかったのだ。それくらい、驚いて声もでなかった。そう、そこにいるのは京極真。彼女が待ちわびていたはずの男だった。

「何、やってるのよ、何で・・・ここにいるの？」

あまりの驚きに涙も出ず、ただ、ぼかんといい表情で彼を見つめている。未だに信じられないのだ。

今日だって何度もかけた電話も繋がらなかったのに、どこにいるのかさえわからなかったのに。まさかこんな間近にいるなんて。

「園子さん、クリスマス、おめでとうございます!!」

何十人もの警備員を振り切って、園子の前に現れた京極真はどこかの童話に出てくる王子様のようで、とてもキラキラ輝いていた。

ただ一つ難癖をつけるとするならば、彼の身に付けていた服

このパーティでどう見ても場違いな空手着　ただそれだけだったのだけれど、この服装で警備員をぴりぴりさせているのを彼はわかっていないのだろうか。それでも彼はあくまで真面目で、息せき切らして園子だけを見ていた。

その真っ黒い真摯な瞳で彼女だけを、見つめていた。



「・・・・・・・・」

「園子」

ぼんやり彼を見つめていた園子は、蘭にポンスと背中を押されるときと我に返る。

振り返れば優しい表情で親友は送り出していた。小さく頷くと、

園子は2、3歩彼の方へ歩み寄り、声にならない声で尋ねた。

「真さん。どうして、どうしてあなたがここに??」

恐る恐るたどたどしく聞く園子の様子に、真は優しい笑みを向けてテノールの甘くて低い声でこう言った。

「このまえ冬季大会を優勝した後に、あなたに電話してその声を聞いたとたん、あなたの姿を一目見たくなりまして。本当はこの年末、春季に向けてさっそく練習を始めようとしたんですけれども、あなたの顔が頭にちらついてそれどころじゃなくなりました、気がつけば飛行機のチケットを取っていたのです。情けないことです。もつと精神を鍛え直さないと・・・」

苦笑いを浮かべ、真は鞆のずれを直すために左肩に触りながら言った。少し頬が赤いのは気のせいではないだろう。

「真さん・・・」

目頭からじわーっと熱いものが込み上げてきて、それはつつつと彼女の頬を伝ってぼとり、ぼとりと会場の柔らかな絨毯を湿らせる。それから慌てて指先で涙を拭くが、それは止むことはなく、彼女の半月型の大きな瞳から次から次へと流れ落ちていく。園子はそれを隠すようにさつと俯いた。

「そ、園子さん・・・?」

そんな彼女に、真はおろおろとした表情で園子の顔を覗き込み、助けを求めるように、蘭の方を振り返った。どうしていいかわからないという様子で。

「大丈夫ですよ。彼女、うれし泣きですから」

少し距離をおいて2人の後ろで見ていた蘭は、笑顔でそう言った。  
「うれし泣き・・・?」

目を丸くする真に向けて、蘭は大きく頷いた。

「あなたが今日この会場に来るのをずっと待ってたんですよ、園子。だから今日ぐらいは甘えさせてあげてください」

「園子さんが、僕のことを・・・？」

蘭の言葉を聞き、驚いて目の前の茶髪の彼女を見つめた。園子はハンカチで涙を拭いて、彼を見上げと、小さくこくりと頷く。

「24日の夜は、あなたと過ごしたかったの。クリスマスのような外国の行事、あなたは嫌いかもしれない。ううん、それともクリスマスが存在自体、あなたは知らないそぶり。だから諦めてた。あのとき、あなた表彰式とかですぐに電話切っちゃったし・・・」

園子の言葉に、真は穏やかな表情で首を横に振る。

「確かに僕はこちらに来るまでクリスマスとはどういうものかはつきりいつて、りませんでしたし、実際どこの誰かともわからない人の誕生を世界中で祝うこの催しはあまり好きではありません。僕はキリスト教信者でもなんでもありませんし。ただ、外国あっちにいと、この時期が近づいてくれば必然的にクリスマスの話が多くなる。そして話は家族や恋人の話で盛り上がり、僕は貴方を意識せずにはいられなくなる・・・。だから誤解しないでください」

彼はそこまで言つて、優しい笑みを浮かべ、園子に笑いかけた。

「僕はクリスマスだからあなたに会いに来たわけではないんです。ただ、貴方に会いたかったから・・・それが重なっただけなんです」  
「ありがとう」

園子は再びあふれ出そうになる涙を必死で堪えながら、最高の笑顔を作つて、彼に感謝の言葉を述べたのだった。      やっぱり、彼が好きだった。

## 2（後書き）

あらずじにも書きましたが、24巻あたりの、京極さんと園子ちゃんが付き合っていない時代でお願いします。

「ところであなたどうして空手着なんか……。まさか飛行機に乗ってる間も、ずっとそれだったわけ??？」

ようやく彼女は落ち着いたところで、先ほどから気にかけていたけれど聞けなかったことを訪ねた。まあ、クリスマスのイベントが好きではない、と先ほど公言した彼がタキシードなどのドレスコードを着てくるとは考えにくい、それにしてもこの格好は普段着にもなりはしない。だから警備員だつて余計に彼に対してぴりぴりしているのだ。真は彼女の質問に、困ったように額を掻いた。

「はあ。ここにくるまで、まさか今日こんな盛大なパーティが行われていることも知りませんで。しかしせっかくここまで来たんですし、あなたの姿を一目見る前に帰るわけにはいきませんでした。だからいろいろ悩んだ挙句、僕の正装はこれしかない、って思いまして」

確かにそうかもしれない。

冬季大会の優勝を果たしたばかりのこの空手着が今の彼にとって、最高の正装なのかもしれない。それは、綺麗に洗濯されていたように、汗の匂いもしないし、糊付けされたようにぱりつとされていて、少しも不潔なイメージが感じさせなかった。

「あなたらしいわね・・・」

園子は口元に笑みを浮かべてそう言った。そんな彼女を見つめ、突然何かを思い出したように彼は茶色のかばんから、黒光りした小さいケースのような箱を大切そうに取り出した。

「なあに？」

「これ・・・あなたに差し上げます」

「え？」

園子はきょとん、として彼を見上げた。クリスマスプレゼントということなのだろうか。さっき、クリスマスは好きではないといっ

たのに。園子はどきどきしながらそれを受け取った。

「・・・開けて、いい？」

「ええ、もちろんです」

園子はきつと指輪であると思っていた。期待に胸を膨らませてその箱を開ける。そうして、開けた瞬間、思わず目を丸くした。

「金、メダル・・・？」

思いもよらぬものが入っていたと思った。指輪だと思っていたから。でも、ガツカリする気持ちは微塵も起こらず。だって、これは彼が勝ち取った証だから。

「ねえ、これって」

「ええ。これは僕が留学して、世界と戦って勝ち得た初めての金メダルです」

「そ、そんな大切なもの、もらえないわよ」

園子は彼の言葉に、あわててメダルを彼の前につき返そうとする。しかし、真は穏やかな表情で首を横にふる。

「これは貴方に持つてもらうべきものなのです。なぜならこれは僕一人で勝ち得たものではないですから」

「・・・どうということ？」

園子は意味がわからない、という顔をする。

「今回戦った相手はどれも強者ばかりでした。やはり世界は強かった。しかし僕は勝つ自身があっただけです。なぜなら、僕にはいつでも貴方がいたから。いつでも僕の傍に」

彼は胸元から大切そうに、メモを取り出した。女の子らしい、いくらか丸みを帯びた字で書かれているメモ。そこには電話番号が書かれている。それは彼女が手紙とは別に、携帯電話を持っていない彼がいつでもその電話を掛けてくれるようにと、小さなメモに書いて送ったのだ。しかしそれが最初とちよつと違うのは、なんかしわしわで・・・。

「まさか・・・それ・・・」

園子は思わず口にした。そう、このメモには彼の汗が十分染み込

んでいるようだった。

「ずっと、持っていてくれたの・・・」

「ええ。これをずっと練習中、試合中、食事中、寝るときも・・・園子さんがいつでも見てくれている、と思うととても力が湧きました。だからあなたに迷惑かけずに済みました」

満面の笑みで言う真。そして自分より20センチほど小さい彼女を愛しそうに見下ろす。

「バツカじゃないの」

「え・・・？」

愛しい女性の思わぬ言葉に、一瞬彼の表情は固まる。園子の肩は怒りと悲しみで震えていた。

「バカよ、大バカ！あなたは勝手よ！！アタシはずっと待ってたのに。いつあなたの電話がくるかわからないケータイをずっと・・・。そんなんで満足しないでよ！！迷惑なのはそうやって一人で解決しようとしちゃうこと！あなたの本当の力にならないこと！！」

そう叫び、ポカポカと真の胸板を叩き、泣きじゃくる。そんな園子の様子に、真はオロオロするばかりで。

「そんな・・・何を馬鹿なことを言っているんですか。いつでもあなたは僕の力に」

「なつてない。なつてないよ。真さん。そんな写真や紙切れだけじゃ通じないんだよ。アタシの愛のパワーはそんなもんじゃないんだから。」

「え・・・『愛』、ですか」

ぽつと真の頬が桃色に染まる。真の胸板に頭を預けたままで、彼の顔を見ることもせず、言葉にならない言葉で必死にその言葉を羅列した。

「お願い。お願いだから約束して。あなたが寂しくなったら電話して。こうやって、逢いに来て・・・。あなたが寂しいと思うときは、私も寂しいんだから・・・」

顔を上げ、真を見上げる。震える手が彼の袖を弱弱しく掴んだ。

「はい・・・」

真は力をこめて大きく頷いた。そして、彼女の手をそつと取る。彼の大きな手は、園子にとってとても熱く感じられた。

いつのまにか、見つめ合う瞳と瞳。

真の熱い瞳と園子の潤んだ瞳が絡み合うように結ばれて

彼女はある言葉を彼に伝えることを決意した。もう自分の気持ちをは分以上は伝えているようなものだけど。でも鈍感な彼はこの気持ちが本気モードだということを気づいていないのかもしれない。だからこそ、今伝えるべきだと思った。意を決して園子はピンクの唇をゆつくりと動かして声に出した。

「ねえ、真さん・・・あのね、一つ聞いてほしいことがあるの」

「ああ・・・僕もあなたに言っておかなければいけないことがありました・・・」

頬を赤く染めて、彼が彼女の瞳を見つめる。

（まさか、彼の言っておかなければならないことって・・・）

その表情から言って、嫌な展開には行かないだろう、むしろ

園子の期待が必然的に高まる。

どきん どきん どきん・・・

心音が大きく高く、綺麗な音を奏でた。

「な、なあに？真さん・・・先に言って」

「・・・園子さんこそ、どうぞ・・・」

「でも・・・おねがい・・・聞きたいの」

園子がつろんとした目つきで彼を見上げる・・・。気持ちは既に陶酔しきっていた。

「・・・で、では・・・」

真は頬を赤らめてコホン、と一つ咳払いをした。それから・・・

「園子、さん」

「はい・・・」

瞳をキラキラにさせて、園子は彼の表情を一秒でも逃さないようにしっかりと見つめていた。

「その赤い服、スカートが短すぎではありませんか？」

「・・・は・・・？」

目を点にして、園子は彼をまじまじと見つめた。

「その胸元も・・・。肌を透けるようなその巻物も・・・」

「巻物・・・」

シヨールのことを言っているのだろう。

「それに化粧も・・・。今日のあなたはこうしてここまで派手な格好をしているのですか？こんな姿で外を出歩かれたら何人もの男が群がるに決まっています。今だって、この会場内に貴方を狙う男がどれだけいるか・・・」

真は警戒した目つきできよろきよろとあたりを見渡す。園子は、彼のその説教じみた言葉を聞いたとたん、へなへなとその場にへたり込んでしまった。今までの雰囲気全体をぶち壊しにするようなこのセリフ。気が遠くなるような眩暈を感じ、再びテーブルに突っ伏す。

「サイツアク・・・」

「そ、園子さん！？大丈夫ですか。しっかりしてください！」

真はあわてて園子の肩に手をかけた。しかし、彼女は半泣き状態で彼のその手を強く振りはらうと、

「なによ！あなたは乙女心なんて少しもわかってくれないんだから！空手バカ一直線にでも何でもなればいいのよ。空手と結婚すればいいんだわ！」



と叫んだ。そしてそのむしゃくしゃする気持ちをこまかすかのよう  
に、園子はすぐ目の前にあった、白くピンクがかった液体の入った  
高級そうなグラスを手にし、ぐぐぐいつと喉に一気に流し込んだ。  
グラスの上の方まで並々入っていたその透明なジュースは見る見る  
うちに、彼女の喉の奥へと消えていく。

「アへ・・・」

そして次の瞬間、彼女は奇妙な言葉を口から吐き出すと、ぐらりと  
彼女の体が傾き、真の胸板にしなだれかかった。みるみるうちに赤  
面する真の顔。園子の大胆な行動に、どうしていいかわからない様  
子だ。

「そ、園子さん。・・・そんな・・・」

そのとき、体をかちこちにする彼の横でコナンがそのグラスの匂  
いをくんくんと嗅ぐと、苦笑いして言った。

「・・・これ、お酒だよ」

「えっ・・・?」

その言葉に驚いて、自分の腕の中の彼女を見る。寝ている。

「真しゃんの・・・ばか」

既に夢の中に陥っているようだが、彼女の目頭には新しい涙が一  
粒ぼろりと落ちた。彼女の口元からは微かにお酒のつんとする香り  
がする。真は思わず苦笑すると、

「まったく、困ったお嬢様だ」

と呟き、そつとその太い指先で涙を拭いてやる。そして彼女を軽々  
と肩で担ぎ上げてゆつくり出口に向かい、歩き出す。

彼のその足取りは重さ、しんどさなどは一切感じられず、それど  
ころか園子を担いで運ぶことを心から楽しみ、また喜んでいるよう  
に思えた。

「園子お嬢様をどうする気だ!」

案の定、たくさんの警備員がものすごい剣幕で真を取り囲むが、  
彼は少しも動じず、穏やかな表情を浮かべたまま、こう言った。

「園子さんを寝室までお連れするんです、だれか彼女の部屋を案

内をお願いしたいのですが・・・」

相変わらず丁寧な口調だ。しかしあたりを見回しても、案の定誰も手を上げるものはいない。それどころか何十人も全ての警備員が銃を構え、彼を狙っている。彼は思わず、

「こまったな・・・」

と思案気に口の中で呟いた。

そんな中、遠くの方からすっと細い手が上がるのが見えた。

「京極さん・・・。こっちです」

という、彼にとっても聞き覚えのある女性の声。

真はその声を聞いたとたん、ほっと安堵の息をついた。彼を囲む多くの警備員を掻きわけて、彼の前に姿を現したのは他でもない、園子の大親友である毛利蘭。その人だった。

蘭は彼を案内しながらずっと彼に担がれている親友の姿を嬉しそうに、しかしどこか寂しそうに見ていた。彼女の幸せそうな表情を見つめながら、蘭は自分と幼馴染の姿を夢見ていたのかもしれない。その隣で、自分のことを心配そうに見上げている一人の少年がいることを微塵も気づかぬまま

話は戻ってあれから2時間経った  
毛利邸3階 毛利蘭の部屋。

蘭はまだぼんやり外を眺めていた。外はクリスマス・イブのために空を着飾ったようにいつにもまして星たちが煌いている。いつもなら絶対感動するはずのこの眺めも、今の蘭には響かない。それだけ今の彼女は感傷的になっていた。

「結局新一、来なかったな……。京極さんみたいに、なんとか時間ギリギリでも来てくれること、期待してたんだけどな……」

蘭はそう何気なく呟きながら、もうすっかり黒くなった空を寂しげな表情で見上げた。

上を見上げたたん、急に目頭が熱くなって 自分の意図に反して、それは頬を伝って、ぽろりぽろりと流れ出した。水晶のようなどても綺麗な涙。

「やだな、泣くつもりはなかったのに……」

くしゃりと泣きながら思わず笑むと、蘭は急いで涙を袖で拭き、再び窓に目をやった。そしてそこで彼女はとんでもないものを目撃する。

そこにいたのは

目の前一直線先に見えるのは、黒い闇の中を白い物体が飛んでいる姿。

しかもこっちに向かって

それは彼女の目から、白い鳥のようにも飛行機のようにも見えた。

そしてそれを追いかける何台ものパトカーのサイレンの音。

「なんなの・・・??」

蘭は思わず目をごしごしと擦ってから、もう一度確かめた。やはりそれは確実に存在した。あわてて机の引出しからオペラグラスを取り出すと、その姿をもう一度探す。

いた。

それは低飛行で、信号機のちょうど上ぐらいを飛んでいて  
「!?!」

鳥でも飛行機でもない。

白い、ハンググライダー。

そしてそれに乗る人物は白いマントとシルクハット、白いスーツ。  
白一色に身を染めた片眼鏡の青年。

そう、まるでそれは・・・。

「キッド……。怪盗……。キッ……。ド」

蘭はどきどきする鼓動を押さえながら、口の中で呟いた。

## 5 (前書き)

このときの蘭ちゃんとキッドは、ちゃんと会話したのは『ほぼ』初めてということで。

漆黒の闇に優雅に飛び交うその白い飛行物体。  
そしてそれを操るのは一人の白き天才奇術師  
そう、彼の名は。

「怪盗キッド・・・」

蘭はオペラグラスを手に、信じられない、と呟いた。  
オペラグラスを持つその手が、そして体を支えるその膝が、ただ  
がくがくと震えている。まだ心臓がときどきする。しかしそれは確  
実にこっちに向かってきて。

50メートル、40メートル、30メートル

オペラグラスの中に映る彼の表情は口元に笑みを浮かべていた。  
片眼鏡をつけているので正確にはわからないが、どこか胸がざわざ  
わ騒ぐのは気のせいだろうか。あの表情、だれかに似ている。

「!?!」

オペラグラスが彼の顔で完全に埋まるとき、蘭は思わずそれを手  
放した。音を立てて床に落ちるオペラグラス。

がしゃん、と派手にガラスが割れた音が耳につく。

しかし、それでも彼女は彼から目を離すことはできなかった。そ  
う、その表情は彼女が待ちわびていた人物とよく似ていて。

「嘘……」

蘭は呟いた。やはり彼は新一とそっくりだった。蘭が長年待ちわびていた幼馴染であり、ほんの数ヶ月前まであらゆるメディアを騒がせていた高校生探偵、工藤新一と。

あのとき、鈴木財閥での船上パーティで怪盗キッドは彼女自身、そう、毛利蘭の姿に化けた。その全ての出来事は彼女にとって、一瞬のことであつた気がしていた。しかし蘭とキッドが入れ替わるその瞬間に、蘭は薄れ行く意識の中で、懐かしい声を聞いたような気がした。

彼の顔もぼんやりと見えていたような気がした。そしてそのときも……キッドのその声は、その顔は、自分の愛しい愛しい幼馴染である工藤新一のものにそっくりだった。だから不安だった。新一がキッドだったら、という不安でいっぱいだった。

だが、その不安はすぐに消えうせた。

なぜなら次の日、道中であるカップルを見かけたからだ。

その事件の3週間前に渋谷で見かけたカップルである。3週間前、雨の降る渋谷ですれ違いざまに見たあの青年。あのときは新一と信じて疑わなかったが、事件の次の日に再び彼を見かけて、蘭は工藤新一とは別人だと確信した。よくよく見れば頭の形、目つき、喋り方。少しずつ違っていた。

その瞬間に、蘭はすべての不安が一気になくなっていくのを感じていた。もしかしたら、自分が彼の姿を追うことに躍起になっていただけなのかもしれない。きっと落ち着いてみればあのキッドも別人に見える。

新一はキッドじゃない、泥棒なんかじゃない。そう思ったのに。



今、目の前に映るキッドは、やっぱり新一にそっくりだった。これは偶然なのだろうか、ただの他人の空似なのだろうか。それとも

気が付けば蘭は部屋を飛び出し、屋上に向かって走っていた。信じたくなかった。けれど、確かめずにはいられなかった。もう一度逢って話がしたかった。

+++

屋上に上がると、蘭はあわてて四方を見渡す。

いた。すぐ目の前に。

彼は蘭が突然屋上から現れたのを見ると、さすがにぎょっとした表情をしてみせた。しかしその表情も一瞬だけで、すぐにいつもの彼の穏やかな表情に戻る。

これがポーカーフェイスというもののなのかもしれない。蘭は、はあはあと息を切らせて彼だけを睨んでいた。

「・・・またお会いしましたね、お嬢さん」

彼は上品な笑顔でそういうと、彼女がいる屋上へと降り立った。白いハンググライダ　はいつのまにか彼の背中にコンパクトに収められていて。

近くで見ると、ますます新一にそっくりだった。

その白い肌も、声も、口調も、微笑みも何もかも。

遠くからはパトカーが数台、こっちへ向かってやってくるのが見

えた。

蘭はそれを確認すると、彼の瞳を悲しそうに見つめた。

「追われてるのね・・・」

「まあ・・・確かにそういう状況かもしれませんね」

しかしそう言いつつも、彼が放つその言葉には、少しも切迫感が感じられない。むしろどこか楽しそうだった。

「ところで貴女の方こそどうされたのですか？その表情はどこか憂いを帯びているようだ。せっかくの美しさが曇りガラスのようにくすんでしまいますよ」

キッドはそういうと、くすりと口元に笑みを浮かべた。気障な言い回し。仕事をするときの、しかも女性を前にしたときの新一に似ている。

油断してはいけない、蘭は本能的にそう思った。

本人にしても、別人にしても、相手は世界に名高い怪盗キッド。

後にも先にも今がチャンスだ。今すぐにも片眼鏡の向こうの素顔が見たかった

だから、

彼女は強行的な手段をとった。それは

蘭はすううつと腹の底から大きく息を吸って、

「アアアアアアッ！！」

と気合を入れながら、ひゅつと風を切る鋭い音と共にその細く長い足を彼に向けて高く鋭く振り上げた。もちろん、狙いは彼の片眼鏡。

「・・・っ!？」

彼はあわてて身を大きく捻った。

間一髪。

そしてそれは彼の前髪を掠る。ぱらぱらと落ちる前髪の先・・・。さすがにこの展開にはキッドも動揺したのか青い顔で、

「ま、マジ？」

という、気障な彼らしくない言葉をポロリとこぼした。

蘭は空手の構えをしたまま、彼を挑むような視線で見つめていた。じりつと彼が一步後ろに下がる。明らかに今の状況だけ取ったならば、彼女が上である。

「さあ、今度こそあなたのそのモノクルを剥がしてみせるわよ」

蘭は勝ち誇ったように彼の顔のど真ん中に指を指した。

その瞬間、・・・ふっ、とキッドが小さく笑った。もう既に、彼特有のいつものポーカーフェイスに戻ってしまっている。その意味深な笑みに、今度は蘭がたじろぐ番だった。

形勢逆転、か。

「おやめなさい、お嬢さん。その清楚な白い下着が丸見えですよ」そんな冷やかすような彼の言葉に蘭はかああっとなつてスカートを両手で押さえた。あまりの羞恥心で顔を上げられない。

「・・・それに、残念ですが貴女に私は捕まえられない」

下を向いたまま、聞こえたのは目の前にいるキッドの自信あふれる言葉。蘭はその言葉に思わず顔を上げ、彼をきつとした表情で睨んだ。

「思つてないわ、そんなこと」

「え・・・？」

「あなたを捕まえようなんて思つてない。私は あなたの正体を知りたいの。ただ、それだけ。あなたを警察に突き出すつもりなんて、そんな考え最初から全然ないんだから」

蘭は挑むように、一步、前に進む。

そう、私はあなたが誰か知りたいだけ。

あなたは一体、誰なの？

「・・・なるほど、そういうことですか」

しばらくまじまじと、探るように蘭の瞳を見ていたが、キッドは突然、全てを悟ったかのように、くつくつと可笑しそうに笑った。

「どうやら、貴女はあの名探偵と私を同一人物ではないか、と疑っているわけですね」

「・・・『名探偵』？」

思わず聞き返す。緊張で、どくん、どくと胸の鼓動が高鳴っていく。

「そうです。貴女の探しているの『高校生探偵 工藤新一』彼でしよう？日本警察の救世主、平成のホームズ、東の名探偵などといくつもの誉れ高い肩書きを持つ、彼のことを言っているのでしょうか？」

動揺して、蘭は思わず後ろへ一歩後ずさった。

「何で・・・」

「ああ、だからといって私が工藤新一だと認めたわけじゃありませんよ。私はただの泥棒ですから。そして彼は探偵だ。それは確かなことです」

彼はそう言って意味ありげに笑った。

「私は完璧主義者なんですね。例の漆黒の星の事件で、貴女に姿を借りる前に少しばかりあなたに関係する情報を調べさせてもらいました。彼と貴女、切っても切れない存在のようですね」

彼が胸ポケットから何枚か写真を取り出して、扇状に広げた。

1枚目は、帝丹高校の制服を着た蘭と新一が肩を並べて歩いている様子。

彼女の手には数学の問題集。眉間に皺を寄せて考えていて、彼はそれを横からアドバイスを与えている・・・という写真。

2枚目はNYのとある廃ビル。

手すりが腐っていて、階段から外へ投げ出された銀髪の通り魔の手を、蘭と新一が2人でしっかり捕まえている写真。

3枚目はトロピカルランド。

ミステリーコースターというアトラクションで乗り物待ちをしているときの写真。見ず知らずの女性の手をぎゅっと握って、彼女の素性を明かした新一に、蘭を始め、周りの人たちが驚いている、という光景。これはきつと、彼が消える数時間前のことだろう。

そして4枚目は、奇妙なことに新一は登場しない。その代わり、メガネをかけた少年　江戸川コナンと手をつないで夜道を帰るシーン。

おそらく、このシーンは蘭が彼に新一への思いを告げた場面だろう。

5枚目は彼が行方不明になったあと、突然姿を現した時の写真。西の名探偵である服部平次と初めて出会ったときのことだ。蘭が心配する目の前で、階段から落ち、姿を消す瞬間　。しゅうしゅつと彼の体から出ている湯気まで鮮明に、その写真には写っている。

6枚目は帝丹高校文化祭の翌日の話。

眠そうに大あくびをしながら、食べかけのトーストを手に、奥の部屋に消えていく彼の姿。そしてそれを嬉しそうに、玄関の扉の隙間から見つめている蘭の姿

そして7枚目は

彼女が7枚目に視線を移そうとしたそのとき、それは次々と普通のランプに変わっていく　。

「お願い・・・待って!!」

蘭は大声で叫んだが時は既に遅し。彼の手中でそれらの写真は次々と赤い格子模様の入ったランプに変わってしまった。

「生憎ですが、それはできません。なぜならこれは、タネも仕掛けもないただのランプですから」

「ふざけないで!」

蘭は思わず声を荒げた。

そんな彼女にキッドは思わずくすりと微笑んで、いいえ、と言った。

「確かにこれはただのトラップですよ、お嬢さん。なぜならもうこれは『薬』の効き目が切れてしまったようですから。効き目がなくなればもう普通のもの何ら変わりません」

「薬……？」

「ええ。あなたたちの過去を知る上で大切な情報を持った薬」  
彼は胸のポケットから小瓶を取りだし、蘭の前で軽く振ってみせた。透き通った、薄い紫をした液体が入っている。ちょうど紫キヤベツで色水を作ったときのような色。

「……あなたは何を知ってるの……？」

そんな彼を見つめ、蘭はおそろおそろ尋ねた。キッドはその質問に一瞬、小首をかしげる。それから小さな間を開けた後、そうですね、と呟いた。

「……私は、何も知りませんよ。知っているのは、これを作った本人。この漆黒の夜空を自由自在に飛び交う一人の魔女。彼女ぐらいではないでしょうか」

「ま……じよ」

蘭は思わず目を間開いて、彼が言ったその言葉だけを繰り返した。それだけ彼の言葉は強い威力を発していた。彼女の脳裏には、長い黒髪の似合う美女が、月の綺麗な空をほうきに跨り自由自在に飛んでいる、そんな光景が見えていた。そして彼女にぴたりと寄り添うのは、白いハンググライダーに乗った白い怪盗。

魔女と奇術師……。一体どんな組み合わせなのだろう。

果たして彼の言うことは真実なのか、偽りなのか。それはわからなかった。

しかし気を抜いたら彼がいつ自分の下から飛びたとうとするか知れないのだ。

蘭は呼吸をするのを忘れるほど、緊張した面持ちで彼を真正面から見据えていた。

一歩でも動いたらまた飛び掛るつもりでいた。

キッドはそんな彼女の強い視線を受け止めながら、ちらりと屋上から町並みを見下ろした。それから、突然明るい口調で、おや、と呟く。その言葉につられ、蘭がその方向に目をやるとそこには赤く点滅するランプを上に掲げる白と黒の車がいくつも列を連ねてこっちに向かってやってくるのが見えた。そう、彼を追う警視庁のパトカーはすぐ傍まで迫っていた。それは米花町4丁目を抜け、目指すは毛利探偵事務所のある5丁目に指しかかろうとしている。このままでは彼を捕らえるのも時間の問題かもしれない。

一体、彼はどうするつもりだというのだろう。

彼女の心配、不安、緊張をよそに、キッドはそれでも楽しげに、下界（？）の様子を眺めていた。そして白い吐息とともに、この言葉をついた。

「やれやれ、相変わらず騒がしい人たちだ。今宵は誰にとっても特別な日であるというのに・・・」

その言葉を終えるや否や、キッドは握り締めていた手をぱっと開く。

ボンッ

何かが弾けたような音。

すると突然その手から彼そっくりのダミー人形が現れ

「任せたぜ、ダミーちゃん」

彼がそう呟くと、それを合図に、まるで自分の意志があるかのように、ダミー少しだけコンパクトなハングライダーに乗り、東の空に向かって飛んでいく

そしてそれを追いかけてパトカーも彼らのもとから遠ざかっていく。

やかましかった街がみるみるうちに静かになり、蘭はあっけにとられたような表情でその一部始終をただ黙って見ていた。

その間、何も言葉が出せなかった。それだけ目の前に起こった事は彼女にとって衝撃的で。

キッドは全てのパトカーがいなくなるのを確認して、ようやくふう、と小さなため息をついた。

蘭はじつとその背中を見つめていた。見つめられずにはいられなかった。

その視線に気づいたのか、キッドはゆっくりこちらに向けて振り返る。口元に穏やかな微笑を浮かべて。そしてその表情のまま、蘭の顔を見つめてこう言った。

「・・・これでまたようやく巖かで静かな夜が訪れました。さてお嬢さん、他に何かお知りになりたいことでも？」



毛利探偵事務所屋上。

毛利蘭と怪盗キッドはそこでお互いの顔をじっと見つめたまま、一歩も動こうとはしなかった。否、実際は蘭の方は動けなかっただけなのかもしれない。彼は微笑を浮かべていた。そして、彼女は彼を睨んでいた。

彼は言った。

「・・・これでまたようやく蔵かで静かな夜が再訪されました。さてお嬢さん、他に何かお知りになりたいことでも？」

「・・・お嬢さん？」  
もう一度、キッドの口がそう発音した後で、蘭ははっと我に返った。

そして本来自分が彼に対して聞きたいことが山程あることを思い出した。

そう、蘭は彼が言った言葉で少しも満足してはいなかった。なぜなら彼が新<sup>キッド</sup>一でない、という証拠さえ一つも立証されてはいなかったから。あの写真は、ただの『記録』に過ぎなかったから

幼なじみで高校生探偵である新一と自分が高校に入ってから過ごした2年間の記録。

新一とキッドが別人であることを肯定する証拠はどこにもない。それどころか、何かで気を逸らせてみせて、そうやって自分を口先だけでごまかそうとするところも新一とそっくりですます彼に対しての疑惑が強まった。

しかし何故か彼女の口はその一つさえ口にすることができなかった。まるで誰かがその言葉を禁じる魔法をかけているかのように。

「・・・ならば、私は去りましょう」

キッドは蘭が何も言わないのを確かめると、さっと漆黒の空に拳を掲げた。それから握っていた手をゆっくりと開ける。その瞬間、目の前に広がるのは光の海・・・。

「眩し・・・！」

それが世に言う閃光弾だと気が付いたのは、蘭がその光を体いっぱいに浴びてからだだった。近くにキッドがいるはずなのに、どうしてもその姿を目にすることができなくなっていた。

「あなたのような美しきレディに少々手荒なまねをしているのは重々承知です。ですが、しばしご容赦ください。なぜなら私は誰にも正体を知られてはいけないのです。それが例え自分の大切な人であつても・・・。その時が来るまでは、絶対に」

「その時？」

「ええ。『その時』です」

閃光弾のせいで目が眩み、何も見えない。

しかしキッドの彼が自分から離れていく空気の動きだけは感じ取れた。

行っちゃう・・・！

思わず蘭は目を片手で覆ったまま、もう片方の手を宙に伸ばしていた。

「待つて！！行かないで！」

先ほど彼が使った閃光弾の眩しさのせいで前が少しも見えない。それでもキッドを捕まえたくて、蘭は必死に手をかき回していた。気がつけば彼のマントの裾をぎゅっと掴んでいた。

「・・・・・・・・アラ??」

キッドが思わず呟いたマヌケな声が、蘭の耳に伝わった。蘭はゆっくりと目を覆っていた片方の手を外してみた。少しずつ、少しずつ目が慣れ、境界もない、ただ白一色だった景色がだんだん輪郭を帯びてくるのがわかった。そして　キッドは彼女の斜め前にいた。

そして彼女にいきなり裾を捕まれ、明らかに体勢を崩し、後ろに大きく反り返っている。

「!？」

キッドはあわてて手すりにつかまり体勢を立て直そうとしていたが、そのマントを掴むその手を蘭が離さないで、結局はそのままの姿勢に留まった。

かなり情けないその姿。

例えて言うならば金の鯨<sup>しやちん</sup>。

キッドは無理やり力を込めて、マントを掴むその手を振り払おうとしたが、空手を嗜む蘭の腕力は半端じゃないらしく、振り払うことはできなかった。

「・・・お、お嬢さん・・・その手を・・・」

キッドの声はかなり上ずっている。その瞬間、蘭は勝ち誇った表情で目の前の泥棒を見下ろした。今では彼女の視力は通常に戻っていた。

「『お嬢さん』なんて呼ばないでよ！私、毛利蘭っていう立派な名前があるんだからっ！」

「その手を離してくださいませんか・・・」

「だめ、あなたが新一じゃないってわかるまで絶対離すもんですか！」

蘭はマントを握り締めたままキッドの顔を見据えていた。

しかしどこか悲壮感が感じられたその表情。決して離してなるものか、彼女の表情は、それほど強い感情を露にしていた。キッドはそこで小さくため息をついた。

「その手を・・・離しなさい」

「嫌よ」

「・・・『蘭』さ・・・！」

キッドは初めて彼女の名前を呼んだ。

「！！！！」

どきんっ

一瞬、蘭の大きく黒い瞳が陽炎のようにゆらゆらと泳いだ。

そしてその瞬間、キッドの白いマントを掴んでいた彼女の手の全ての力が抜けた。白いマントはするすると自分の意思で彼女から逃れるように離れていく・・・。

新・・・一・・・。

全ての力が抜けたように、蘭はへなへなとその場にしゃがみこん

だ。

瞼の裏に見えるのは、ただ一人の青年。自分だけを見つめる青年。

『蘭』

彼の声が聞こえる。

優しい眼差しで自分を見つめている。

いつも自分を守ってくれた、包んでくれたその眼差しで。

そして今、瞼に写るその幼馴染と、白い衣装で身を固めた目の前の青年とが彼女の中でシンクロする。

新一、キッド、新一、キッド、新一、キッド、新一、新一、  
・・・

「いや！」

蘭は思わず目を覆り、ガタガタと震えながら小さく叫んだ。

「蘭・・・さん？」

戸惑ったようにキッドは蘭を見つめたが、すぐに状況を飲み込んだのか、次の瞬間にはいつものポーカーフェイスに戻っていた。そして白いマントをひらりと翻し、そのまま優しく彼女の体を包み込む。

「・・・蘭さん、落ち着いて・・・」

その声はまどろんだ春のぬくもりのように優しく、穏やかだった。マントに、蘭の体の大半はすっぽり包まれていた。・・・いつのまにか彼に抱きすくめられていた。自然に。紳士的に。

「深呼吸です。大きく息を吸って、吐いて・・・」

彼が耳元でささやき、大きく呼吸を始める。それに倣い、蘭は深呼吸を試みた。乱れていた呼吸のリズムも、6回を過ぎたころには彼とほぼ同じリズムになっていた。

それでもしばらく深呼吸は続いていた。

「ずいぶん落ち着いたようですね」

そのあと10回ほど過ぎた後で、彼はふつと深呼吸を止め、彼女を抱きしめる手の力を緩めた。

「ありがとう・・・」

冷たいコンクリートを見つめたままの視線。

「どうされました？」

キッドは優しく紳士的な瞳を、目の前の彼女に投げかける。蘭は目線を少しだけ上げた。

「・・・ねえ、キッド。あなたが新一じゃないのなら、どうして私に優しくするの？」

何で、あんなに優しく私を抱きしめてくれたの？

私を大切そうに、抱きしめてくれたの？

あなたは気障な奇術師だから？

他の女の子にも同じことをしてるの？

私が哀れな少女に見えただけなの？

・・・それとも、あなたはやっぱり・・・。

蘭はまた少し目線を上げた。

彼の白い顎が見えた。

あなたはやっぱり新一なの？

蘭は思い切って目の前にあるキッドの顔を見上げた。彼は少し考えているように、眉に皺を寄せ、目を瞑り指先で顎をなぞっていた。やっぱり似ている、と思った。そうして再び彼の素顔が知りたくなかった。

白い肌、透き通るような肌。そして片目を隠した片眼鏡。

手を伸ばせばすぐにそれは外せる距離にあった。こくり、と唾を

呑み込む。そしてそつと手を宙に浮かせたそのとき、キッドはようやく決意した、とても言うようにゆっくりと瞑っていた両目を開け、その言葉を口にした。

「泣いて欲しくないんですよ、あなたに」

驚いて彼を凝視し、出しかけた手を慌てて引つ込めた。

「彼のために、泣いて欲しくないんです」

彼は先ほどと一つも表情を変えずに、その言葉をもう一度言った。  
「どうということ？」

彼はそこで蘭を抱きしめていた手を解くと、立ち上がって隅の方にカツカツと靴音を立てて歩いていく。

「ねえ、キッド！」

蘭は我慢できずにその大きな背中に向かって叫んだ。それに反応するように、ぴたりと止まる足音。その緊張感に、蘭は思わず口をきゅつと結び直した。キッドはくるりと振り返り、蘭と体を向き直してゆっくり口元を緩ませた。

「そうですね……。いろいろ理由はありますが、一番は彼が・  
・工藤新一が私と似ているからでしょう」

「そんなのわかってるわ。そっくりよ」

蘭が怒ったような拗ねたような表情で抗議する。そんな彼女の様子に、キッドは思わず苦笑した。

「顔のことを言ってるんじゃないんです。探偵と怪盗……。私たちは一見両極端にいるように見えて実は同じ場所に向かっていたんです。昔も、そして今も」

「同じ場所……」

「そう。そしてそこまで辿り着けずに、私はまだ怪盗を続け、そして彼は……」

そこまで言つて、彼は一度言葉をやめた。そして思い直したように口の筋肉の動きを元に戻す。

「工藤新一は、あなたの元から行方を晦ましている」

彼は蘭に背中を向け、再び隅の方へゆっくり歩き出した。コッコ

ツと靴底の音がして。その背中に、蘭はおそろおそろ尋ねる。

「・・・やめたいの？あなたは怪盗を」

「・・・」

彼は珍しく何も答えずに、歩きつづけた。蘭は大声で彼の背中に言葉を浴びせつける。

「だったらやめればいいじゃない。殺人もしてないんだし、宝石だつて多くは返しているんでしょ？それにあなたがいいことだつていっぱいしてるよ、私知ってるよ？今からでも遅くないよ。ね？キッド」

その言葉は心から心配していた。

キッドはそんな彼女の心遣いに思わず口元を綻ばせ、ゆつくりと振り返った。

「お気遣いありがとうございます。でも・・・。言つたでしょ？さつき。『その時』が来るまで、つて。今は『その時』ではない。・

・まだ、パーツが足りないんです」

「パーツ・・・」

蘭は口の中で彼の言つた言葉を繰り返した。そしてゆつくり尋ねる。

「新一も・・・同じなの？」

「・・・ええ。だから戻つて来れない。だから余計にもがいてる・

・。少しでも早く、あなたの元に帰ろうと必死に頑張っている・

・。そんな彼の状況も考えずに泣くのは、彼にとって酷だと思いませんか」

「・・・つまりあなたは、少しぐらい我慢しなさい、と言つてるのね」

蘭はくすりと笑つて、月のバックに照らされた彼の優しい表情を見つめていた。

いつのまにか目の前の怪盗が新一ではないことが前提で『こと』が進んでいた。気が付かないうちに、蘭はおそろく目の前の彼は、



自分の探している新一ではないことを理解した。

渋谷ですれ違ったあの青年みたいに、また自分の行き過ぎた感情から来た人違い。

さつきはあんなに目の前の彼が新一じゃないかって信じ込んでいた自分が今では滑稽にさえ思えた。

確かに彼の得意としているその気障なセリフは、仕事モードのそれに似ていた。

背格好だつて大体同じ。時折見せるその優しさも……。

しかし今、この白い罪人が話した言葉がすべて絵空事とは思えなかった。それだけ彼の瞳は澄んでいたから。嘘を言っているとは思いたくなかったから。

きつと彼は彼で苦しんでいるのだ。そして、新一も……。

「それでも我慢してたんだけどなあ……」

蘭は溢れ出しそんな涙を堪えて、空を仰いだ。涙が一滴も目尻からこぼれないように。

「そうだよ。新一、頑張ってるんだもんね、こんなところで負けてられないよね……笑って待つてあげなきゃ、いけないよね……」

「……蘭さん……」

キッドが切なそうな顔をして彼女を見つめ、そうしてその頬に手を伸ばしたそのとき。

「蘭姉ちゃん！」

蘭とキッドはほぼ同時に振り返った。

そこにはメガネをかけたあの少年が、新一の小さいころの生き写しのようなあの少年が、息をはあはあ切らせて立っていた。

そう、その少年の名は、江戸川コナン。  
新一の好きな探偵ものの名前を持った少年だった。

「蘭姉ちゃん、どいてて！」

そこにいるのは、蘭の家に居候している弟みたいな少年。江戸川コナン。まだ小学生になったばかりだっていうのに。

遠くからまるでピストルで相手を打つそんな仕草をして、腕時計のようなものを彼に向けている。それはとても鋭い視線で。そしてその視線はいつもの彼じゃなかった。まるでそれは。

そこまで思いかけて、蘭はふっと苦笑した。

（私、新一病にかかっている。だれでも彼でも、新一に見えてくる。疲れてるのかな）

そう思ってしまう。

「まったく。待たせやがって」

自分のすぐ横でその声を聞き、蘭ははっと我に返ると、おずおずとキッドを見上げた。

コナンを見つめるその顔は嬉しそうに笑っていた。

「どいてったら！」

コナンの語調を強めた声に、はっとして蘭はキッドから離れた。それから2人から遠く離れた場所に行き、心配そうに2人の様子を伺い見た。

これから目の前の少年が何をしようとしているのかわからなかった。それでも蘭は2人の間にただならぬ何かがあることは感じることはできていた。

+++

月が綺麗な夜だった。

オレンジ色の月が煌々と闇夜を照らしている。そんな月の下で2人は向き合っていた。

探偵と、怪盗。

「よお、名探偵。・・・遅かったじゃねえか。来ねえかと思ったぞ」

キッドはちらりと、闇を照らす時計台に目をやった。0時まで、あと25分。

それから彼は、コナンの構えているそれに目を遣って、

「そんな飛び道具、あのお嬢さんの前で使ってもいいのか？」とおどけたように言った。

「オメー、蘭に何すつかわかんねーからな」

キッドは目の前のコナンが言ったその言葉を聞き、思わず鼻でせせら笑う。その表情は明らかに皮肉めいていた。コナンはむっとして彼を睨んだ。

「・・・何だよ」

「女性にとつて年に一度の大事な日、クリスマスイブ。そんな夜に遅くまで、彼女を一人にさせておいた『男』が何をいうかと思つてな」

その言葉の意味に、はっとするコナンの顔は明らかに先ほどまでのそれとは異なっていた。コナンは思わず声を潜めた。

「・・・オメー、一体何を知ってる？」

「さあ・・・ね」

意味ありげにキッドは笑った。その様子にコナンはいよいよ顔を

青くする。

「ま、まさか蘭に何か変なこと吹き込んだりしたんじゃないだろうな・・・!?」

動揺するコナンを前に、彼は涼しい顔でこう言った。

「さあ、どうだろうな。それでも、何が起こったとしても。子どものフリに慣れて本来の自分として彼女に接するのを怠ったおまえへの罰だと思った方がいい」

「なんだと!？」

コナンは思わず声を張り上げた。その瞬間、彼はにやりと笑って腰元から一瞬の速さで銃を取り出すと、彼に向け、発射した。

催涙弾だ。

霧状の催涙剤はまるで煙のようにあたりにたちこめていく。彼はあわてて目を庇ったが、既に遅く、それは彼の目を強く刺激した。

「それじゃあな、名探偵。・・・また逢おう」

バツ

ハングライダーを開く大きな音が耳元で聞こえた。背中につけていたそれが再び開く音。

「畜生っ・・・!待てっ!卑怯だぞっ」

コナンは再び何とか目を開け、ごほごほと咳き込みながら腕時計型麻醉銃を構えたが、目が痛いわ、涙がぼろぼろ出るわで、撃つことすらできなかった。

そんな彼を見透かしたように、高らかに笑うその声が耳についた。相変わらず自分の声にそっくりなその声で笑われると、余計に気持ちが悪くしゃしゃしてくる。

そんな気持ちも相成って、耳元でハンググライダーが飛び立つ音が聞きながら、何もできない自分に思わずクソッ、とつぶやいた。そしてようやくその効き目が切れたときには、ハンググライダーに

乗ったキッドは既に遙か彼方に消えていたのである。

「コナンくん!？」

パタパタと音を立てて駆けてくる足跡に、彼ははっと、縮こめていた姿勢を正した。もちろん蘭だ。

「何、どうしたの？何があったの？怪我はない？どうして泣いてるの、ねえコナンくん!？」

さっとハンカチを取り出して、コナンの頬や目尻を拭いてやる。

「僕は大丈夫だよ。それより蘭姉ちゃんは？」

全然大丈夫そうではないのに、それでも笑顔を作る彼に対して、蘭は思わず苦笑して、コッソ、と指先でコナンの額を押し上げた。

「何が僕は大丈夫、よ。大丈夫なわけじゃないじゃない。・・・こんなになっちゃって。キッドと何話したの？」

「・・・別に。どうしてこんな場所に降りたか、蘭ねーちゃんと何話してたか聞いたただだよ。そしたら・・・」

（子供相手に催涙弾なんて放ちやがって。今度会ったらただじゃすまねーぞ）

もちろん効き目は薄い簡単なものを寄越した様子ではあるけれど、それでも未だ目が痛い。目をパチパチと何度も瞬かせさせながら答えるコナンに対して、蘭は心底心配そうに眉を顰めた。

「もー。キッドったらコナンくんに一体何したのよあ・・・」

「僕は大丈夫だって。それより蘭ねーちゃんは？」

慌ててコナンは蘭の顔を見上げた。

「キッドに何もされてない？大丈夫だったの!？」

自分がとある場所の帰り道。毛利探偵事務所の屋上に降り立つキッドの姿を見つけ、慌てて駆け上ると、そこにはキッドだけではなく蘭の姿があつて。とつても近くに彼女はいて、今にも泣き出しそうな、そんな顔をしていたから。そしてそれを愛おしいような表情で彼が見つめるから。

そんな二人に、彼は、嫉妬した。

「蘭ねーちゃん、アイツに何言われたの？」

「え？・・・別にたいしたことじゃないよ。コナンくんは心配しなくていいの」

「でも・・・」

「そ・れ・よ・り」

尚も食い下がるコナンに対して、自分を労わり、ずっとハの字だった蘭の眉が、急に逆ハの字に変わる。

「コナンくんこそ何してたの？今までどこに行ってたの？ずーつと姿が見えなかったわけだけど？」

語調も強くなり、自分を鋭く見据えるその視線に、コナンは思わず縮み上がった。

「え・・・どこって・・・。パーティ終わった後、ずっとおうちにいたじゃない。蘭姉ちゃん、お部屋にこもりつきりだったから気づかなかったんだよ」

顔が青ざめ、さっきよりも自分の言葉が少し早口になっているのを彼は感じていた。

「嘘つかないで。じゃあ何で洋服着てるのよ？私、コナンくんがお風呂入っていたの知ってるのよ？何でパジャマじゃないの？それに何でさっきそんなに息を切らしてたのよ」

「い、い、嫌だなあ、蘭ねーちゃん。勘ぐりすぎだよ。息せき切らせてたのは階段を上ってきたからじゃないか」

「ふーん。じゃあパジャマは？」

「だから、ほらっ。さ、サンタさんを待ってたんだ。パジャマじゃないとサンタさんに失礼かなと思って・・・」

我ながら小学1年らしい、純粹無垢な返答をした、とコナンは内心ほくそえんだ。しかし・・・。

「ふーん・・・サンタさん」

コナンはますます顔を青くした。今でも怖い顔をしていたというのに、彼女の顔は更に般若の表情それに変化していた。ぽきぽき・・・

と指を鳴らしている。

「蘭姉ちゃん、怖ひ・・・」

コナンは引きつった笑顔でそう呟いた。その瞬間蘭は腕を思いっきり彼に伸ばした。間一髪。ひよい、と逃げるコナン。

「待ちなさい、この不良少年！私はあなたをそんな子に育てたつもり、ないんだから！」

「ごめんなさーいっ！！」

コナンは逃げる。

蘭は追う。

また逃げる。

また追う。

その繰り返し。

毛利探偵事務所の屋上で行われたそのいたちごっこは、しばらく続いていたのである。

その様子を、毛利探偵事務所から少し離れたビルの屋上で双眼鏡を手にし、胡坐をかいて見ている男が一人。先ほどのキッドである。さつきより明るくなった蘭の表情に、彼は嬉しそうに口元を緩ませて

「あらあら、随分ご満悦ですこと」

皮肉じみた語調を含むその声にキッドは思わず振り返った。いるはずのない人物がそこに、いた。

月の光を受けて。



時刻は深夜11時35分を過ぎていた。

誰もいなくなつたとあるビルの屋上。

そこにいるのはキッドただ1人　だつたはずだつたのだが。

「あらあら、随分ご満悦ですこと」

皮肉じみた語調を含むその声にキッドは思わず振り返つた。いるはずのない、人物がそこにいた。口許に美麗な笑みを浮かべて。

紅子だ。しかしいつものキッドの姿で逢うときのその衣装ではなかった。淡いグリーンのニットのワンピースに、厚地の青いロングコートを羽織っている、普段着。頭にも手にも首にもじゃらじゃらとした不気味な装飾品もないし、杖もない。それはどこにでもいる普通の女の子といった感じだった。そう、キッドと向き合うときの魔女ではない、江古田高校に通う女子高生　小泉紅子がそこにいた。

驚いて後ずさる。こんな私服姿で逢うとは思わなかったし、何ヶ月か一緒にすごした中で、そんな格好をするとは思ってもいなかったのだ。

「オメー、どうしてこんなところに・・・」

動揺し、ついいつもの様子でこう喋ってしまう。そんな自分に気づき、あわてて口を押さえた。そして、

「こんなところにもいつまでもいられては風邪をひかれますよ、お嬢さん」

と口調を変えて、いつものキッドの顔をつくる。彼女はただ黙ってキッドを睨んでいた。

「どうされたんです、お嬢さん」

キッドはそれでもたじろぎもせずに紳士的な笑みを見せた。そこで彼女はようやく、きつくへの字に結んでいた口の端をゆるゆると開いていく。視線は一ミリたりとも変えることなく、ただキッドを鋭く睨みつけながら、強く、はつきりとした口調でこう言った。

「・・・私は正々堂々、小泉紅子としてやってきましたの。あなたも元のあなたに戻られたらいかがかしら？」

一時たりとも離さないその凜とした視線に、その瞳に、魔力が込められていると言ったらきつと誰もが信じるだろう。それほどまでに彼女の瞳は紅く輝いていた。そして艶美な色がこめられていた。  
・  
・  
・しかし。

「元の私、とは？」

キッドはくすりと笑って言った。そんな彼の様子に、鼻持ちにならない、という顔で紅子は溜息をつき、まあこの際どうでもいいわ、と呟いた。そしてまたキツとした強い表情で彼を見据える。

「あなた、どういうつもりですか？どこの馬の骨とも知らないあんな小娘に鼻の下伸ばして。自分の好みのパーツを持っている子なら、誰でもいいっておっしゃるつもり？ならば私とて今すぐこの顔を変えましょう。それであなたが私だけの虜になってくれるというのでしたら。魔法であなたを苦しめるだけ苦しめて結果を出せずに

いるより、一番手っ取り早い方法ですもの」

「何のことです・・・？」

キッドはわざと、何をいつているのかわからない、という表情で小首をかしげた。その様子にますます紅子は顔を赤くする。

「・・・『黒羽くん』！」

イライラとした表情で、そしてヒステリックに紅子はその名を呼んだ。キッドは、だれですか、その人は、と言いかけて口を嚙んだ。紅子がその言葉を言わせないというように、鋭い視線で自分を睨んでいたからだ。今にも泣き出しそうな顔をして。

「あ、紅子？オメー・・・」

思わずうつろたえてしまう。

泣いたら確か魔法が使えなくなるんじゃないかなかったか

「大丈夫。心配無用」

紅子はそう言ってぎりつと下唇をかみ、拳をきゅつと握り締める。そんな彼女の健気な様子に、彼はようやく諦めたように大きくため息をつく。

そしてジャケットの胸ポケットを2、3度撫でると、白いマントを翻した。次の瞬間にはシルクハットも片眼鏡も白のスーツも消え、代わりに普段のパーカーにジーパン姿の青年が現れる。

そこにいたのは、江戸田高校2年B組、黒羽快斗。

にやり、と片頬だけ吊り上げて、彼は目の前の女子高生に向けて笑った。

そんな彼を見つめて、呆れたように、そしてどこか物悲しそうに少女は小さく一つだけ溜息をついたのだった。

「これでいいんだろ、紅子」

『仕事着』から『本来の姿』に戻った彼が、にやりと笑って彼女に聞いた。

「・・・」

紅子はその言葉には答えず、ただ、ぷいっと彼から背を向ける。

「おい・・・」

キッドもとい快斗は思わずげんなりとする。

「何を怒っているんだよ」

「別に。キューバの最大のエメラルド『祈りの女神』を盗むためにクリスマスパーティー抜け出して・・・。その後はすぐ帰ってくると思いきや、こんなところで道草食ってるなんて。貴方のしていることに幻滅した、ただそれだけのことですわ」

「・・・はあ？」

頭に？マークを浮かべた、そんな表情で彼は紅子の顔を見ていた。自分が何故そんなに彼女を怒らせているのかがわからなかったのだ。そんな表情を見て、更に彼女の苛々に拍車がかかる。言葉にも勢いがついていた。

「あの中森さん、寂しそうでしたわよ。寄り道しないで帰れば十分帰りまでに間に合えましたのに。まったくあなたがあのような少女に現を抜かしていたから」

非難するような紅子の口調ぶり。

今日の紅子はいっぴくイライラしているようだった。そして突如こう快斗に詰め寄った。

「さっきの質問のこたえ。まさかYESじゃないんでしょう」

「・・・？」

「あなたは中森さんだから好きなんでしょう？例えば私が中森さんの顔と私の顔を魔法で取り替えたとしても、あなたはまた中森さん

を選ぶんでしょう?」

真剣な紅子の顔。

「・・・けっ。だ、誰があんなアホ子を」

快斗は一度はそのことばを口にしてみたが、真剣に自分を見つめる紅子を見てから、思い直してこう言った。

「・・・確信なんてねえけどな。おまえと違ってあいつ、相当アホだから。おまえの顔になって、ぱにくってわんわん泣いているあいつを放っとくわけにはいかねえだろ」

そのとたん、紅子はくすくすと笑った。

今日初めて彼に見せた笑顔。

かわいい。

快斗は一瞬どきり、とした。

「黒羽くんらしいご回答じゃない」

「・・・逆にオメーはらしくないことばかり言ってるけどな」

快斗は思わず反射的にそう答えた。

「え?」

きょとんとした顔で紅子は快斗を見つめる。

「いつも青子のことを敵対視しているおまえが、今日はあいつの肩ばかり持つじゃねえか。あいつが今のおまえの言葉聞いたら、絶対喜ぶと思うな」

快斗の言葉にみるみるうちに紅子の顔が動揺の色に染まり、少しの間うつむいた。そして再び顔を上げたときはいつもの彼女の何に對しても自身ありげな表情に戻っていた。

「・・・それは、これ以上あなたのライバルを増やしたくないからですわ。もちろん、あなたのハートを最後に射止めるのはこの私ですけれどね。・・・今に見てなさい。・・・あなたが私の虜になるのはもうすぐですわ、フッフ」

いつもの調子で高らかに笑う彼女。けれど快斗は、今日紅子が青子の肩ばかり持っていた理由がそれだけではないことはわかっていった。だから思わずくすり、と口元を綻ばせる。

「紅子」

「・・・っ!!」

思わず紅子は顔を彼から背けた。

が・・・目の前に黄色のカーネーションを差し出され、彼女は強制的にそれを見ないわけにはいなくなっていた。

「・・・あ、あら、何ですか・・・黄色のカーネーションだなんて。・・・真紅の薔薇ならわかりますけれど・・・。そんなもの、私には」

彼は何も言わずにそれを天高く放り投げる。

「!？」

そして次の瞬間、天高く上がった黄色のカーネーションは、黄色のマフラーへと変わっていた。紅子は目を大きく開き、ふわりふわりと落ちていくマフラーを見ているしかなかった。快斗はそれを彼女の目の前で掴み取ると、そっとその細い首に優しく巻いてやる。

「・・・やるよ、オメーに。クリスマスプレゼント」

「え・・・？」

「鼻の頭が赤いぜ？まるで童謡に出てくる『赤鼻のトナカイ』みたいだ。せつかくの美人が台無しだぜ」

彼のからかうようなその言葉に、紅子は嫌ですわ、と言って顔を赤らめ、すぐに鼻を両手で覆った。

「・・・こんな寒いところで、ずっと待ってくれてたんだ・・・。ありがとな」

快斗はいつになく優しい表情を彼女に向ける。

「そんな。私はあなたが私以外の女に優しくするのが許せなかっただけですわ。」

紅子はあわてて弁解するが、既に彼は彼女の目の前にいなかった。いつのまにか、屋上の真中に立ちすくみ、漆黒の空を見上げている。

そしてポケットから何か無線のようなものを取り出し、それを取り始める。

「何・・・」

「どの道、ジイちゃんにヘリコプターで迎えを頼んでたんだよ。まさかあの子に逢うとは思わなかったから・・・。頼んだのは40分も前だし、きっとこの近くの空、うるちよろしてるんじゃないのか」

彼はそう言っただけで無線機でなにやらぶつぶつ相手の見えない誰かと話し始める。きっとその相手が彼の言う、ジイちゃんなのだろう。紅子は動揺して声を荒げた。

「そんな・・・。こんな時間にこんなところで、あのヘリコプターを近づける気？それこそあなた本当に警察に！」

そんな彼女の様子に、快斗はくっくつと笑う。思わずムツとして紅子は快斗の耳を引っ張った。

「いてっ・・・いてててて」

「何が可笑しいんですの？黒羽君！私は本当にあなたのことを心配して」

「悪い・・・でも、大丈夫だよ、紅子。ジイちゃん、ああ見えて何でもできるんだぜ。親父がキッドとして名をはせたときも、ジイちゃんは付いてたんだ。もし、信頼のおける若い誰かが今ここに100人現れたとして、仲間を一人選べと言われたって、俺はやっぱりジイちゃんを選ぶよ」

快斗はふつと笑って空を見上げた。そして、ほら来た、と口の中で呟いた。微かにばば・・・とヘリコプターの音が聞こえてきた。しかしそれはうるさいというほどではない。

それほどヘリコプターは上空に飛行していた。豆粒大というのは大げさだろうがそれに近い距離から、するすると縄梯子が降りてくる。

「・・・おめーはどうする？」

彼は振り返ってこう言った。

「やめておくきますわ。・・・はしごが切れたり、解けたりした

らそれこそ洒落にならないし、それに警察に見つかったら面倒じゃない。いくらなんでも、こんな街中で人間がヘリコプターに引き上げられているのを見たら騒ぐのは当然ですもの。キッドの姿ならまだしも、あなたは今、ただの高校生の姿なんですからね」

紅子の言葉に快斗は思わず失笑する。

「・・・確かに。だから・・・」

彼はいつのまにか白のシルクハットとマントを手に使っていた。そしてマントを翻し、自分の全身を隠すようにする。

「3、2、1」

と呟くと、彼はまたキッドの姿に戻った。

「・・・では、ごきげんよう。お嬢さん」

紅子は彼のスイッチを入れ替えするようなその、言葉遣いの切り替えに思わず苦笑する。

「それでは・・・すばらしきクリスマスを」

彼はそう言つて、紅子の手の甲に軽くキッスをした。

「あっ」

とろん、とする紅子の顔。

キッドはそんな彼女を見て、優しく微笑むと、縄梯子に手をかけた。するとそれは速いスピードで引き上がられていく。

そのとき、町中から再びざわざわ沸き始めた。どうやらキッドがいることに町にいる誰かが気づいたらしい。

『キッド、キッド、キッド、キッド、キッド、キッド・・・』

やまないキッドコール。

もうすぐ深夜12時だというのに、町はどこに人が居たのかというくらい賑わっていた。

紅子は騒がしいBGMを背に、ため息をついて彼の姿を追った。



ヘリコプターに辿り着いたキッドは、群集に向かって大きく手を振って見せた。そして一度紅子の方を向いたと思うと、軽くウインクをする。相変わらずのエンターティナーだ。紅子はそんな彼をぼんやり見つめていた。

キッドは紅子は何も反応を示さないのに気づくと、思わず苦笑して再び群集に向かって大きく手を上げて見せてから、ヘリコプターの中に消えた。

そうやって、ヘリコプターはゆっくり江戸田町に向かって飛んでいく。

「ホント、・・・能天気な男」

紅子は彼がヘリコプターの中から見えなくなるまで見届けていたが、最後にポツリと呟いた。そして大きくため息を吐くと、自分は非常階段を下りていく。カンカンカンと音をたてて。

ビルは7階建て。

暗い足元を照らすのは月明かり一つ。それでも紅子は、今は『小泉紅子』のままだった。

そつとその手を見つめつ。彼にされた手の甲のキス。柔らかな唇の感触が残っていた。

紅子は彼が口づけたその場所に、そつと自分の柔らかな唇を合わせた。そして彼女はふつと口元を綻ばせて、再び階段を下りていった。

月が彼女の顔を美しく照らしていた。  
彼女の顔は、とても優しかった。

時刻はPM11:45を回っていた。

毛利探偵事務所2階、毛利蘭の部屋。

蘭は窓から漆黒の空を見上げて、ふう、と溜息をつく。どこかで白いハンググライダーを操り、漆黒の空を鳥のように優雅に飛び回る彼の姿を思い浮かべながら。

「ねえ。教えて、キッド。新一のこと、今日はもう待っても無駄なのかな。・・・私はどうすればいいの？ねえ、キッド・・・」  
しかし、いくらその名を呼んでも、もう彼は蘭の前に現れてくれることはなかった。聞こえるのは大通りを走る車の音だけ。

蘭は思わず寂しそうに笑って壁から背を向けた。長い髪をかきあげながら視線を床に落とすと、そこには白い紙飛行機が所在なさに落ちていた。それはまるで彼が自由自在に操っていたあの白いハンググライダーのようで。

「キッドは逢いたい人に逢えたかな。・・・新一は今・・・何、してるんだろ」

しだいに涙が溢れてきた。

少しでも早く、あなたの元に帰ろうと必死に頑張っている・・・。  
。そんな彼の状況も考えずに泣くのは、彼にとって酷だと思いませんか。

先ほどの彼の声が突然彼女の脳裏に蘇る。

「わかってるよ、キッド」

蘭は涙声で呟いた。泣いちゃいけない、そんなことわかってるのに、目からこぼれてくるのは出てくるのは、塩辛い水。止め処なく

流れていくのは、大粒の涙。思わずぎゅっと口唇をかみしめた。そのとき

彼女の耳に聞こえてきたのは携帯電話の着信メロディー。蘭はその音にはっとして顔を上げ、それを勢いよく取り上げた。そしてあわてて耳に当てる。

「・・・あ、あの・・・」

「よお、蘭。メリークリスマス、だな」

その声を聞いたとたん、彼女はへなへなとその場にくず折れるようにしてへたり込んだ。

その声の主は、工藤新一、蘭の幼馴染の声。今日こつやつて話をすることを、ずっと心待ちにしていた大好きな彼の声。彼の声が、彼女を闇から光にみるみるうちに、引き上げた。

## 11（前書き）

まだ蘭ちゃんが新ちゃんに電話を掛けられない状況のころです。

「よお、蘭。メリークリスマス、だな」

電話の向こうから囁くように、噛み締めるように吐き出されるその言葉。その声を聞いたとたん、彼女はへなへなとその場にくず折れるようにしてへたり込んだ。

その声の主は、工藤新一、蘭の幼馴染の声。今日こうやって話をすることを、ずっと心待ちにしていた大好きな彼の声。そんな彼の声が、電話口から自分の名前を呼んでいる。

「な、何よ。・・・何よ、今さらっ！」

蘭は思わず声を張り上げた。虚勢を張っていた。

「悪いな、蘭。いつも心配かけて」

穏やかな新一の声。それは、いつもと変わらない、優しい声。でも

「バカ・・・」

蘭は鼻をずっと吸りながら呟いた。じわじわと涙が瞳の奥から湧き出して止まらなかった。ようやく彼の声が聞けた嬉しさと、実際には触れることができない寂しさと。そんな2つの複雑な感情が彼女の中で交錯していた。

「・・・泣いてるのか？」

心配そうに訊ねる電話口の彼の声。思わずムツとして蘭は涙でぐしゃぐしゃだったその顔をこわばらせた。一体誰のせいだと思ってるのだ、と。泣いてるわよ、そう言おうとしたとき、彼女は再びキツドが言ったあの言葉を再び思い出した。

。。  
少しでも早く、あなたの元に帰ろうと必死に頑張っている。。

「・・・泣いてなんか、いない・・・わよ」

蘭は震える喉を必死に押さえながら言った。

「そっか？俺はおまえが鼻たらしで、泣いてる姿がこっから見えるんだけどな」

「ばっ！・・・た、たらしでなんかっ・・・」

蘭はあわてて自分の鼻を押さえながら、声を張り上げた。もちろん、たらしでなんかいない。そう、新一の冗談。電話の向こうで、くつくつと可笑しそうに笑う声が聞こえる。

「もうっ」

蘭は思わず怒りのため息をついた。それから短い沈黙が流れた。

「・・・悪かったな。待たせちまって」

沈んだ新一の声に、蘭は思わず虚勢を張った。

「・・・大丈夫、気にしないで。今日はすごく楽しかったんだから。園子さんのクリスマスパーティー行って、ビンゴ大会やって自転車当たってそれで・・・」

パーティーの終わりには京極さんが登場して、酔いつぶれた園子をお姫様抱っこして彼女の部屋まで運んでいった。そのシーンが明瞭に頭に浮かんでくる。

しかし、何故か彼女の口からそのことは言うことができなかった。親友の幸せを心から喜んでいるはずなのに。何故か、今だけはどうしても口に出すことができなかった。喉に詰まったようなその溢れ出る感情が、その声を塞いでいたのかもしれない。

「それで・・・」

蘭はその涙を飲み込んで、続きを言おうとした。しかしそのとき、彼が全てをわかってるというような口調で

「園子、京極さんに逢えたんだろ、よかったな」と遮った。

「え？」

思いがけない彼の言葉に、蘭の目は点になる。そんな彼女に、新――は思わず苦笑した。

「コナンに聞いたんだよ、電話で。でも・・・ごめんな。俺は今回、京極さんみたいにくっへ帰れそうにねえんだ。今日も、明日も」

「そう」

蘭の声は無意識のうちに沈みきっていた。彼女にとって、その言葉はかなりショックだった。しかし、それでも表情に出さないように必死に堪えていた。そう、ここでも、キッドの言葉が影響されていて。

「でもクリスマスプレゼントは・・・」

「知らないよ。私、そんなの」

蘭はすぐさまそう反応した。

それは遠慮なんかじゃない、全然彼女は彼のプレゼントを期待してはいなかった。蘭が欲しいのは、彼自身だから。新一が前みたいにくっへ戻ってくればそれで何にもいらぬのに。                      なのに。

「いいから、オメーに受け取って欲しいんだ」

どきり。

蘭の胸がまた小さく高鳴った。彼の強い語調になにかある一種の思いが感じられるようで。最近の新一は昔とはだいぶ違って見えた。随分優しくなつた気がする。

「・・・わかった」

蘭は頬が紅くなっていくそんな自分に気がつきながら、小さくこくり、と頷いた。

そのとき。かたん、と部屋の向こうで何か物音がして、蘭ははっとして振り返った。誰か、いる。

まさか。

「・・・どうした？」

怪訝そうな彼の声。

「う、うつん・・・何でもない」

蘭はそう言いながら、ある僅かな期待を感じ、そーっと気配を感じさせないようにドアの前まで忍足をする。

「新一・・・あのね」

「あん？」

やっぱり。

彼の声はそのドアの向こうから聞こえる。

そこに、いる。

蘭は、思い切ってドアノブを回した。

「っ!!」

そこにいるのは、江戸川コナン。そう、彼、ただ一人。

口元には白いマスク。耳には片方だけのイヤリング。

彼はぎよっとした顔で蘭の顔を見ていた。

そしてあわててそのマスクとイヤリングを口元から剥ぎ取ると笑顔を作った。

「ど、どうしたの、蘭姉ちゃん」

「・・・コナンくん」

蘭はちよつと拍子抜けした顔になってしまふ。そこに間違いなく彼がいると思ったから。

「新一、知らない？そこにいなかった??」

「え？ずっと僕一人だったけど」

コナンはきよとん、とした顔で蘭を見つめる。

「え、だって確かにそこで・・・」

彼女は、そう言いかけて、そこではたと、言葉を止めた。



何故、こんなにタイミングよく、新一は電話をよこしたのだろう。  
何故、この少年は今、ここにいるのだろう。

何故、少年だけしかないこの場所から、新一の声が聞こえたのだろう。

目の前で自分を見つめるこの少年。そしてこの電話の主である幼馴染の彼。これがもし、同一人物だとしたら……。

そこまで考えて、蘭の手がコナンの頬にするすると伸びていく。  
そして、

「ごめんね、コナンくん」

と呟くと……。

「あててててて、な、何するんだよつ、蘭姉ちゃん！」

思いつきりコナンの頬をぎゅーっと抓ったのである。

いや、掴んだ、捻った、引つ張った、と言ったほうが、言葉としてみれば適切かもしれない。頬の皮を顔から剥ぎ取りでもするかのように。

「イテテテ！もうやめてよ！」

コナンはあまりの痛さに思わず目に涙が浮かんでいる。蘭はその言葉に、ようやく彼の頬を捻っていた手を外し、申し訳なさそうに言った。

「ごめんね。あなたのこと、キッドかもしれない、って思ったの。キッド、変装するのも声を変えるのも得意でしょ？だから、もしかしたらあの後、実は帰ったんじゃないかって、コナンくんの姿になってこの家に忍び込んだのかもしれない、と思って」

「いくら何でもキッドは子供には変装できないよ。それに何で僕になる必要があるの。それだったらキッドが、新一兄ちゃんの姿に最初からなつてればいいじゃない」

コナンは思わずひりひりと痛む頬を撫でながら抗議する。

「だって……だってさ」

蘭は小さく、そして少し困ったような微笑をして、目の前の少年の紅くなった頬を優しく触れた。

彼なら。

自分の心をここまで浮上させてくれた彼は、最後の仕上げにこんなサプライズを用意してくれてもおかしくなかった。

本物としては来られなくても、変装して自分の心を癒すことはきつと彼にとっては容易い御用だと思ったから。

「でも、違っただね」

電話をくれたのは、キッドではなく、ホンモノの『彼』だった。時間はギリギリだったけれど、イブも彼の声が聴けて。

忙しい忙しいといつも言っている彼が自分に電話をかけてくれたその事実。

「よかった」

ポツリ、と蘭は自然とその言葉を零した。キッドじゃなくて。ホンモノの『新一』の声で。もしもこれがキッドであつたならば、しばらく自分はきっとキッドの優しさに溺れてしまふところだった。彼に魅了されてしまふところだった。

それが一夜限りの彼からの『クリスマスプレゼント』だったとしても。

ふと、余韻に浸っていたそのとき、「あっ！」と小さく声を上げて、蘭は携帯電話を見返した。案の定、既に彼からの電話は途切れ

ていて、単調な通信音しか聞こえることはなく。

「もうっ！」

どうしてこういつもうまく行かないんだろう。もっと彼の声を聴いていたかったのに。

自分の妙な詮索で、少しの時間もなくなつて。自分のせいで、神様がくれたチャンスを放棄してしまった。

まだ、満足できてない。できるわけない。

だからといって、自分からは電話ができない。何も行動が起こせない。スキだという気持ちも伝えられない。

自分は新一の手の平の中で転がされているだけなのだろうか。そんなわけない。だけど、アクションを起こせるのはいつも新一のほうで。一方通行で

「ズルイよ・・・」

電話を切ったのは自分の所為だけど。でも、新一に恨み言を吐きなくなる。吐いたっていいじゃないか。新一が電話番号を教えてくれないのが悪いんだから。

鼻の奥がつんとしてくる。目が染みて、今何か喋ったら、哀しみが言葉とともに溢れ出そう。ぎゅっと下唇を噛み締めた。しだいに喉の奥から込み上げてくる感情。このままでは涙が湧き上がってきて。どうやらキッドの効き目もここまでのようだ。思わず目頭を押え、蘭は俯いた。

「蘭姉ちゃん、大丈夫？」

心配そうに自分を見つめるその少年の澄んだ瞳。彼女は目の前の彼がゆらゆらと陽炎のようにゆれていくのを感じていた。涙で滲んで前が見えなくなる。

どうして目の前のこの子が新一じゃないんだろう。そんなことを

思ってしまう。

思っではいけないことは解ってるのに。

「蘭姉ちゃん」

コナンの手が優しく蘭の腕に触れたとき……。

泣いてほしくないんですよ、あなたに。

不意にあの声が、あの言葉が、あの表情が浮かんできた。

蘭は突然夢から覚めたかのようにはっと顔を上げ、なにやら考え込むように真正面に目を向けた。

あのとき、見つめていた彼の蒼い瞳。あれは何を意味してたのか。そのポーカーフェイスの裏に、何を隠していたのか。

彼のために、と付け足してはいたが、きっとあれは自分のためでもあったのではないだろうか。

彼と自分は境遇が似ている、とキッドは言った。

もしかしたら、新一を待つ自分と同じように、彼には……。

蘭はそこまで考えて、ふっと苦笑した。そして目頭にたまった涙の粒を指で拭いきり、

「泣かないよ、キッド」

と清らしい表情でつぶやいた。

その言葉に、コナンは思わず声を張り上げる。

「……どういうことだよ、蘭ねーちゃん!??」

「ううん。何でもないっ」

蘭はそう言っただけで笑うと、その小さな少年から背を向けてみせた。

今になってようやく気づいた。

こんな特別な夜に逢いたい人に逢えないのは、自分だけじゃないってこと。

新一だって自分と逢いたい気持ちはきっとホンモノ。声を聴いていればわかる。

でも、さっき自分の目の前に降り立って自分を慰めてくれたあのキッドだって、そして彼の帰りを待つ彼女だって、きっと今の自分とおんなじ気持ち。

そう、世界中にはきつと、こんな自分たちみたいなカップルが沢山いるから。

思いは繋がっているのに、逢いたくても逢えない状況。

自分だけが寂しい思いをしているんじゃないくて。

空を見上げて、愛しい相手のことを思っている人は沢山いるはずで。

「一人じゃ、ないんだよね」

こうやって空を見上げるのは。

思い合っていれば、逢いたいと願っていれば、願いは必ず届くから。

願っていよう、信じていよう。

次の聖なる夜には、君と過ごしていただけるように。全ての人が笑顔で迎えられますように。一人の願いが、全ての笑顔に変えられます様に。

空には輝く満天の星。ホワイトクリスマスイブにはならなかったけれど、明日もきつとならないけれど、でもこんな晴れた寒空には白い星がよく映えて。

「空に輝くイルミネーション、だね」

ポツリ、とコナンが言った言葉に我に返る。

「新一も見ればいいな」

「そうだね、きつと・・・。 見てるんじゃないかな」

優しく呟くコナンの横顔に、蘭は静かに微笑んだ。

夜が明けた。

今日は待ちに待ったクリスマス。

子供たちはいつもよりきつと早起きで、朝一番に枕元に置かれたサンタクロースからのプレゼントを見つけ、喜んでいることだろう。

毛利探偵事務所にて。

早朝、予告通り朝刊より早く、彼女宛に一通の手紙と小包がポストに投函されていた。

もちろん差出人は、白ひげのサンタクロース、ではなくて、幼馴染の工藤新一。そして中身は　　。

「悪かったな。突然切っちゃって。昨日はずーっと現場にいて、電話もできない状況だったし、それでようやく時間ができたと思ったら、いきなり刑事さんに呼び出されて。それから電話することもまたできなくなっちゃって」

電話の向こうで新一が申し訳なさそうに言った。蘭は彼にもらった星の形にカットされた石が沢山施された首飾りを付け、鏡でその姿を確認する。その表情は満面、輝かしい笑顔に満ちていた。

「ううん。それにしても、よく私がこの首飾り欲しがってたのわ

かったわね」

「バー口。言つたろ？俺は探偵だ、って。蘭の考えてることぐら  
いお見通しなんだよ」

「そつか・・・」

蘭はくすつと笑みを浮かべる。

「・・・そーいや、コナンから聞いたんだけど、昨日オメーキッ  
ドと逢つたそうじゃねえか。大丈夫だったのかよ」

突如声を潜めて、彼は心配そうに蘭に尋ねた。そんな彼の様子に、  
蘭は得意満面、な顔でフフンと笑った。

「平気よ。逆にキッドのファンになっちゃったもん、私」

「へっ！？ちょ、どーという意味だよ。おまえ一体昨日アイツに  
何っ・・・」

明らかに新一の声が裏返っている。蘭はくすくす嬉しそうに笑い  
ながら、あることを思い出して、あ、そうだ、と呟いた。

「・・・っ？」

明らかに焦つたのか、動揺したのか、一瞬彼の呼吸が乱れた。

「・・・あのねえ、新一とキッドって似てるのよ？」

「俺とキッドが？・・・何で」

怪訝そうに、あるいは不機嫌そうに彼が聞き返した。

「・・・それは・・・」

蘭は一度言葉を切り、意味深げに口元を綻ばせながら  
「内緒よ。キッドと私の秘密」



受話器の向こうで、彼が何度もその秘密を知りたがったが、蘭は最後まで答えようとはしなかった。

だって、そう。

『今はその時じゃない』から。

夕方になると、蘭は夕食の支度をするために台所にいた。コナンは今日は博士の家で少年探偵団のメンバーとクリスマスパーティーをするために、既に家にはいない。

ここにいるのは、父である小五郎と自分だけ。

去年と同じで物足りない。ホントはこんな日は母である英理と3人で行きたかったが、結局それも今年も叶いそうにない。

クリスマスなのに、なんだか平凡な、いや、いつもより寂しい一日の始まりだ。

昨日の夜から今日の朝にかけて不思議で幸せな一日があったというのに。

彼から貰った首飾りをそつと胸元につけ、一人褒めてくれる相手もないまま。それでも胸元に彼がくれた証を感じてちよつとばかり幸せになつてみたり。

そんなとき、テーブルの上に置きっぱなしにされていたスポーツ雑誌の朝刊に気づき、蘭は何気なくそれを手にした。そして一面を飾る彼の姿にすぐに釘付けになる。

『白き怪盗、またも華麗に宝石をドロン！』『空上に現れた怪盗エンターティナー、美しき仕事の数々』

一体どっちの味方なんだ、ときつと新一やコナンが見たら怒るに違いないそのタイトルに、蘭は苦笑した。紙面の内容は、今日の朝刊ではまたもキッドが現れ、華麗な奇術を駆使して、杯戸美術館にあるキューバ国家の大宝石を盗んだ、というもの。新聞記事とほぼ同じスペースで、キッドの写真が載せられている。中を開くと、2面、そして社会面にも彼の特集が。相変わらずの人気ぶり。

そんな彼と、昨日あんな風に出会って。抱きしめられて。慰められて。

なんだか今でも夢ではないかと思うほど。

杯戸美術館の屋上から、口元にちよつと小馬鹿にしたような笑みを浮かべて、地上の何十台ものパトカーを見下ろしている写真。その写真を見ながら、蘭は彼女の目の前で自分と等身大の人形を瞬時に出し、バルーンに載せて飛ばした、そんな彼の姿を思い出していた。

「・・・おい、蘭っ！おまえ宛だつてよー」

彼女の父、毛利小五郎が階下で素っ頓狂な声を上げたのを耳にした。その声にはつと我に返ると、蘭はそれをテーブルの上に戻し、スリッパをパタパタと音を立てながら急ぎ足で台所から顔を出す。

「えっ？」

慌てて階段を降り、リビングを抜け、事務所へと続く廊下のドアを開けたとたん、目にしたものは

深紅のバラの花束。50本くらいあるだろうか。

「お届けものです」

花屋の制服を着ためがねをかけた冴えない20そこその若い青年がにつこりこちらを見て笑っていた。そしてその隣には不機嫌そうな小五郎の顔。

「じゃあ、ここにサインをお願いします」

差出人を確認する暇もなく、彼が差し出した用紙に、言われるがままにサインして、それを受け取っていた。

「ありがとうございます、それでは失礼しましたー」  
帽子を取って深々とお辞儀をして、ドアを閉めようとする。慌てて蘭もそのドアノブに手をかけたとき、

「笑顔が、戻りましたね。・・・お似合いですよ。思ったとおり。目の前の薔薇も霞むようだ」

突然、その声が変わった。

昨日の、あの声。新一にも似たあの声。

うれしそうに、優しく紳士的にその口許が微笑んだ。

「・・・キツ・・・？」  
ばたん。

完全にドアが閉まる。

はっと我に返って、慌ててドアを開けて廊下を見ると、そこには、誰の姿もなかった。

「・・・おい、どした？」

ぽかんと閉まったドアを見つめていた娘に、小五郎は心底怪訝に思ったのか、肘で強く突付いた。それでようやく我に返る。

「っ・・・」

「にしても、なんだかすげーな。ナンだよ、これ。年の数の倍はあるぞ。・・・あの探偵齧りのくそくそ生意気な探偵ボウズからじやねえのか？」

不機嫌そうに彼は呟くと、そのバラ1本1本の数をひい、ふう、みいと数え始めた。そんな父の姿をぼんやりと見ながら、蘭は首を横

に振る。

「多分、違うと思うよ・・・」

「違うと思うって、おま・・・」

不思議そうに娘を見つめてから、彼はその花束の中から、何かに気づいてそれを抜き出した。そこにあるのは、1枚のカード。

「なんだこりゃ！」

再び素っ頓狂な声を上げる。そこには丁寧な字でこう書かれていた。あの予告状に必ずつくキッドの可愛い落書きマークも添えて。

『昨夜の貴女に親愛をこめて 怪盗キッド』

『昨夜の貴女に親愛をこめて 怪盗キット』

言葉に、父である小五郎は心底驚いた。そして信じられない、という顔で自分を見つめる。そんな自分自身も、カードに書かれたその名前に「やっぱり」という思いと、それでもまだ信じきれない思いと、そんな複雑な思いで心を埋め尽くされていた。

花を届けてくれた青年。にやりと微笑んだその口許。きつとまた変装してやってきたのだけど。

最後の最後に自分に囁いた言葉は忘れられない。彼の声。

アレは、やっぱり夢じゃなかった。

一瞬心がぶると震えて、それを隠そうと慌てて深呼吸を隠れて一つした。

「昨夜の貴女」・・・だあ？おい、蘭。おまえこいつとどういう・・・」

今だ信じられない表情で、小五郎は素っ頓狂な声のまま、蘭を見つめた。

「まさか探偵の娘と怪盗がデキてた、だなんてそんなことはないよなあ、おい・・・。そーなったら俺は・・・」

青くなつた顔で小五郎はまるで夢であつてくれというように頭を、何度も何度も横にがくがくと振った。

「ちよつ、お父さん、違うよ。それはきつと勘違いで・・・」

「そーだ、あの探偵ボウズはどうするんだ、あいつはっ・・・・・・・・・・・・・え？勘違い？」

きよとん、として小五郎は娘の言葉に言葉を止めた。

「それは何かの間違いよ、きつと。だって私、キッドが隣町の杯戸美術館に盗みに入ったとき、まだ園子のパーティ会場にいたんだよ？どこでどうやって彼と会えるっていうのよ」

「あ、ああ。でも・・・仕事のあと、深夜12時近くに、米花町のどっかの建物の屋上で、キッドは誰かと会話しているところを目撃されているんだ。長い黒髪が綺麗な高校生か大学生くらいの女の子と」

ぎくり。

蘭の顔が青ざめる。その表情の変化に小五郎も思わず顔を青くする。

「蘭、おまえ・・・まさか」

「ひ、人違いよつ。人違い。これも、もしかしたら園子がふざけて送ってきたかもしれないしっ」

「・・・まあ、あの子ならこんなことするかもしれないねえが・・・」

小五郎はぶつぶつ呟きながらそれでも不信そうに尚もその花束と娘を見比べている。蘭はそんな父親を見ながら大きくため息をついた。それから、彼には見えないように小さくそつと微笑んだ。

ひらひらとバラの花束の中から落ちていくカード。蘭はそれを手にとると、それをじっくりと眺めた。印刷された黒字の太ゴシック体で書いた簡素な文字。

それでも十分彼女は嬉しかった。そしてそれを大切そうにエプロ

ンのポケットにしまうと、彼女はそつと窓から見える西の空を見上げた。

昨日、キッドがいなかったら、自分はどうなっていたらう。新一を罵り、泣き喚き、醜態をさらしていたかもしれない。彼を困らせていたかもしれない。

しかしそれをしなかったのは、キッドが傍にいてくれたから。自分を慰めてくれたから。彼の本音を自分に聞かせてくれたから。

「感謝してるよ、キッド」

蘭は未だ目線を窓の向こう、はるかかなたの空に向けたまま、ポツリと呟いた。

茜色の空が、とても綺麗だった。

まるで彼女の今の心を映しているかのようにその空はとても澄み切っていた。

蘭はしばらくその空を見上げていたが、ふと自分の部屋にあの白い紙飛行機が落ちたままだったことを思い出し、早足でその場を後にした。

早く、白い紙飛行機をこの綺麗な空に飛ばせてみたかった。

それはきつと、遠く、遠く遙か彼方まで飛んでいくような気がしていた。

昨日あの漆黒の空から突如現れ、また消えていった心優しき一人の奇術師が乗っていた、あの白いハンググライダーのように。

どこまでも、遠く、遙か彼方まで。





### 13（後書き）

とりあえず、これで本筋は終わります。

あとは、オマケ。コナンちゃんと哀ちゃん編です。

別に二人がデキてるって話じゃなく、この話の裏設定。

コナンくんが一体蘭ちゃんがキッドと会ってるときにどこに行ってたか。そのことをちょっとね。それではまだまだおまけまでよろしくお願いします。

## エピソード1

キッドが毛利蘭と毛利探偵事務所屋上で接触しているそれよりほんの少し前、江戸川コナンは阿笠邸の前にいた。彼は少し焦っているように見えた。しきりに時計を気にしている。

時刻は深夜11時を20分ほど過ぎていた。

背伸びして自分何とかそのチャームを押すと、すぐに玄関のドアは開いた。ほっと表情を緩ませる。ドアが開いたその瞬間から甘いお菓子の匂いが彼の鼻孔に進入してくる。

この匂いはクッキーだろうか。

「あら、早かったのね・・・」

頭にバンダナをつけ、濃い水色のエプロンをした哀がサンダルを履きながら顔を出す。

「おう、まあな。・・・それより何だよ、この甘い匂いとその格好。今からお菓子教室でも開くつもりかよ」

コナンは小鼻をひくつかせると、改めて哀の着ているものを上から下までぐるりと見回した。そんな彼の姿に眉を寄せる。

「バカね。明日の準備じゃない。まさかあなた、明日、ここでクリスマスパーティーすること忘れたなんて言うつもりじゃないでしょうね」

呆れた。瞳がそう語っていた。

「バーロ、忘れるわけねーだろ。昨日だって歩美ちゃんたちとパーティーグッズ買ったんだから。・・・ってそーじゃなくて。俺が聞きてえのはだな。何でオメー、こんな時間にクッキーなんか作ってるんだよ。タネだけ作つとけば明日でも間に合うだろ？」

よほど焦ったのか、唾を飛ばすぐらいの勢いで弁解するコナンに対して、彼女は小さく、あら、と言ってクールに笑った。

「あなただって他人のことも言えないじゃない。もうあまり時間が

ないとはいえ、子供がこんな深夜の夜道をうつろつくこと自体、おかしいはずよ。よく警察に補導されなかったわね」

「バー口、ほど・・・」

補導されかかったよ、ここに来るまでに3回も。

コナンはそう言おうとしてやめておいた。彼女に一笑されるのがオチだからである。

「・・・？」

もちろん、哀は怪訝な顔をして彼を見ていた。

「そ、それより・・・」

コナンはあわてて話題を変える。

「・・・わかってるわよ。はい」

哀は小さくため息をすると、ポケットから折りたたんだその白いものを取り出して、彼の手の平の上に乗せた。

白いマスク。

しかし、それはただのマスクじゃない。

1度だけ使った、彼女専用の変声機。工藤新一と江戸川コナンはまったくの別人であると

いうことを、蘭に思わせるために博士が作った、世界でたった一つしかない代物。

サンキュ、とその手を引っ込めるコナンに、哀はじろり、と彼を睨んだ。

「な、ナンだよ・・・」

どうもその目で睨めると弱い。

「・・・蝶ネクタイ型変声機を壊したなんて呆れて物が言えないわ。あなたらしくもない。あなたにとってそれは何においても一番大事なアイテムだったはずじゃないのかしら？」

哀はため息交じりにつぶやく。彼女のその言葉は今の彼にとっては痛いものだった。

「しゃーねーだろ？蘭が洗濯機に入れちまったんだからさ」

軒先に干されていたあの赤色の蝶ネクタイ型変声機の無様な姿が、

彼の脳裏に鮮やかに浮かんできて。

コナンは決まり悪くなつて頭をぼりぼりとかいた。

「大切なものなら自分でどこかに置いたり、しまつたりするのが普通じゃないの？」

哀のいうことはごもつともである。コナンはわかったよ、と半ばふてくされた表情で呟いた。しかし、今日の彼女はいつにも増して厳しい。解っているのだから言わなくてもいいのに。こうまでして自分を苛めたいのか。

そう、確かに彼は蝶ネクタイ型変声機を壊していた。

それに気づいたのは、先ほどの園子が真と再会したあのパーティの会場でのことだった。

蘭が寂しそうな表情をしていたのを見て、コナンは『工藤新一』の声でクリスマスに蘭に電話するつもりだったのを、急遽早めて、イブの夜にすぐに彼女と連絡をとろうとしたのである。しかし案の定、水に思いっきり浸かった変声機はうんともすんとも言わず……。

焦った彼は変声機をすぐさま直してもらおうと阿笠邸に電話した。

そこに出たのは、哀。

コナンが焦心の気持ちでそのことを相談すると、「何なら私の変声機、貸してあげてもいいわよ」という、思いもかけない提案が返ってきたのだ。

機械を直すには時間と体力がいるだろうから、博士が無駄なことはしなくてもいいように、と。

実際、それを直すのには調整などもあるため、丸1日はかかるというから、コナンはもちろん彼女の厚意をありがたく受け取ることにした。

というわけでコナンはこんなイブの夜に、阿笠邸で、哀と少しもロマンチックではない会話をしているのだ。

「・・・大事に扱ってよね。また使うとは限らないけど、一応博士が私が便利ないように作ってくれたんだから」

『私が便利のように』の部分強く強調して言う彼女に対してまた苦笑い。コートのポケットにマスクを入れているのを見ながら、思わずジト目になってその言葉を返した。

「わあってるよ。それでもオメーにすげえ感謝してるんだぜ」

「あら、そうは見えないけど」

哀はそう言って冷笑すると、それじゃ、と言って内側のドアノブに手をかける。

「え、あ、おい」

「・・・急ぐんでしょ。もうすぐイブ、終わっちゃうわよ。あなたを待つてる彼女のためにも、こんなところで無駄話しないでさっさとそれ持つてお家へ帰りなさいよ。・・・じゃあね、幸運を祈るわ。・・・ま、その場しのぎの幸運でしかないかもしれないけれど」捨て台詞のように、その言葉を残してドアを閉めかけた哀に、コナンはあわててノブをガツと掴んで、その手を止めさせた。

「待てよ、灰原」

「・・・何」

哀は突然ドアを閉めようとした手を止められて、少し面食らったような顔をした。

「まさか、これ使うから電話を貸してくれだなんて言うんじゃないでしょうね。い・や・よ?」

「違うよ」

コナンは思わず苦笑する。それから、コホンと咳払い。

「おめーは、ちょっとぐらいイブの夜に期待とかしたりしねーのかよ」

「期待?」

眉をしかめて、怪訝な顔をする。何を言い出すのだ、この男は。そう目が語っていた。明らかに不信がつている。そんな相変わらず

な彼女に思わず苦笑しながらも、言葉を続けた。

「そう。年に一度の、この聖なる夜に何かが起きるんじゃないかっていう期待」

彼は彼女に対して頷いてみせると、歯揃えのいい白く輝く歯を見せて笑った。彼女の怪訝そうな表情は依然変わらない。

「何が起きるって言うの？まさか死んだおねーちゃんが生き返るとかそんな奇跡が起こるっていうの？」

「・・・いや、それはさすがに無理だけど」

それが彼女にとって一番いいことには違いはないけれど。もちろん、彼女はそんな答えをはなから期待していなかったようで、小さく「そうでしょうね」と呟いた。

「あのなあ、・・・いちいち俺の話にチャカすなよ。人の話もよく聞けってーの」

さすがにいらつとしたのか、明らかに不機嫌になってしまった彼に対して、哀は社交辞令のように「わかったわ、聞きましょう？」と言った。

まったく今日に限って、扱いにくい。今日はどことなく不機嫌であって。それが何だかは解らないけれど。苦笑いを浮かべつつも、彼はどうにか自分のテンポに持っていこうと、笑顔を作った。

「知ってるだろ？・・・今日はクリスマスの前の日。クリスマスイブだぜ。たとえばサンタクロースだとか、そいつが子供の姿であるおまえの元に現れたりすることだってあり得るわけだろ、そしたら・・・」

哀はふつと笑って、ああ、とつぶやいた。

「それがあなただって言うつもり？・・・だけどあなたサンタの格好も全然してないし、大体、明日のプレゼント交換でのサンタ役は博士に決まってるはずよ」

呆れた表情で自分を見つめる彼女の視線に、コナンは

「まあ聞けよ」

と笑って制し、かばんからごそごそと綺麗に包装された紙袋を取り出す。そしてそれをそつと彼女の小さな手に握らせた。

「メリークリスマス、灰原」

と呟いて。もちろん、哀は驚いた表情で彼から渡された包みを見つめる。

「・・・何、これ」

少し戸惑った顔で自分の顔とその包みを何度も見比べている哀の様子に、コナンは思わず微笑んだ。

「プレゼント交換とは別に、おまえに渡したいものがあってさ。

昨日、歩美ちゃんたちと買い物してる途中で見つけたんだ。・・・

おまえに似合うと思うぜ」

「『似合う』・・・？」

哀は表情を変えず、ようやく目線を紙包みに落ち着かせた。そしてその包みを丁寧に開ける。

中身は　　白い耳当てだった。

ウサギの顔が耳の部分についていた何とも子供チックな、キャラクタ―物のウサギ。

哀はしばらく間を開けて、無表情でこう言った。

「何、これ」

先ほどと同じセリフ。しかし明らかにその言葉の内容は違かった。明らかに不満の色を出している。この話を振る前よりももっともつと機嫌が悪くなっている。そんな気がした。

先ほどはそんな表情を少しも出さなかったが、もしかしたら結構その中身に期待していたのかもしれない。もちろん、指輪とか高価なものを期待していたわけではないだろうが。

きつと、この『アニメチックな顔のウサギ』と耳当てというアイテ

ムが問題なんだろうな、コナンはそう解釈した。そしてあわてて弁解する。

「ほ、ほら。この前アニマルショーみんなで行っただろ？そんなオメー、シヨーのメインアニマルだったホワイトライオンのストラップ買ってたからさ」

「ああ、レオンの」

哀はひんやりとした視線を耳当てに置いたまま、彼に相槌を打つ。そう、と彼は頷いて見せた。

「そんなときのオメーすげえ嬉しそうだったから。本当はオメーそういうの好きなのかなと思って。それにこの格好だったら絶対ジンたちにバレねえって」

「だからって・・・」

明らかに不満げである。

体は子供だが、心は18歳の大人。恥ずかしくてこんな付けられない、といたいのだろうか。これが、特別にプレゼントするために時間を変えてまでの代物なのだろうか。

もしかしたらそう思っているのかもしれない。それとも、もっと別のことも考えているのだろうか。コナンはあえてそのことは深く追究しないことにした。

「まあ、つべこべ言わねーで付けてみるよ」

「ちよつと・・・」

「いいから」

コナンは強引に手を伸ばすと、彼女の手から耳あてを取り、そつと彼女の耳に装着した。それからバンダナつけているのを思い出し、慌てて頭からそれを抜き取る。そして彼は両手を組み、満足そうな顔で、よし、と呟いた。

「・・・似合うぜ、とっても」



「・・・誉めてるの？」

ジト目で哀はコナンを睨む。

怖い。

思わず引きつった笑みを浮かべる。

「ほ、ホントだって！ たくしつけーな。おまえに似合わねえと思うなら、俺はそんなの買わねえよ！」

その言葉に、哀は一瞬ぎよっとした顔をして彼をまじまじと見つめた。その後で彼女はようやく、ぎこちなくだが、そっと耳あての感触を手で触って確かめた。

ずっと、黙ったままで。

「・・・何とか言えよ」

その沈黙に耐え切れず、コナンはとうとうそうツツコミを入れた。哀は一度耳あてを外し、手でもてあそびながら、

「嬉しいのか、嬉しくないのか微妙なところね・・・」

「おい・・・」

「嘘よ。ありがとう、私が子供のとき、組織から与えられた服しか着なかったから・・・興味あるわ」

「『興味』ねえ」

コナンは不満そうに呟いた。結局のところは気に入ったのかどうなのか。哀はそれ以上何も言わずにくすりと笑うと、玄関にある銀色の壁時計をちらりと見て、ちよっと待ってて、と早足で再び家中に入ってしまった。コナン一人を残して。

「お、おい。灰原？」

コナンはあわてて腕時計に目をやる。時間はあまりない。彼女は何をしようというのか。

2、3分の間、彼は時計を見ながらその場を行ったり来たりしていた。

鈴木邸でパーティを終えたあと、部屋にこもりつきりだった蘭のことが気かりで仕方が無かったのだ。また、泣いてはいないだろうか。彼はそわそわと時計を気にしていた。

「まったく、何やってんだよ、あいつは・・・」

そうばやいた時・・・。

「おまたせ・・・」

パタパタとしたスリッパの音に、コナンははっとして振り返った。彼女は手にあるものを持って彼の目の前に立っていた。

「・・・？」

「メリークリスマス、サンタさん」

哀はそう呟いて、そっとそれを彼の前にさし出した。それは温かいミルクと、クッキー。

驚いて目を丸くするコナンに向かって、哀は言葉を続けた。

「知ってる？子供たちはサンタさんに、プレゼントをもらったお礼にこれを用意するんですって。あっちにいたとき、クラスメートがそう言うてはしゃいでいたのを思い出したの」

「え・・・、これを俺に？」

面食らったような顔でコナンは哀を見つめた。

「・・・耳当てのお礼よ。・・・少なくとも今だけはあなたは私のサンタさんではあったから」

哀はそう言っただけで彼から逃げるように視線を逸らす。頬をほんのり紅くそめて。

「・・・灰原」

コナンはしばらくの間、彼女の横顔をじっと見つめていたが、ふっと嬉しそうに表情を緩ませて、サンキュ、と呟いた。それから彼はそっとそのクッキーが何枚か載せられた皿に手を伸ばす。それをゆっくり口の中にはおぼる。

甘くて、おいしいクッキー。優しさと愛情が込められた手作りのクッキー。

1つを食べきり、2つ目に手を伸ばしたとき、コナンははたと気づいてその手を止めた。

「まさかオメー、これを俺に食わせるつもりでこんな夜遅く・・・」

「う、己惚れないでっ。言ったでしょ？あなたがサントさんになんてならなかったら私だってクッキーをあなたにあげるつもりなんてなかったし。だ、大体こ、これは試作品だったんだから！」

彼女は珍しく動揺して、一気にその言葉をまくし立てた。

「試作品？」

怪訝な顔をしてコナンは哀の顔を覗き込む。

「そ、そう、明日の焼き具合を見る試作品よ」

哀は動揺を隠せないのか、まだ上ずった声のままで。

そんな彼女の様子にあまり気にかけることもなく、コナンは試作品ねえ、と言ってクッキーをじろじろと見ながら苦笑した。

「何ならこのまへの文化祭のとき使った、A P T X 4 8 6 9 の解毒剤の試作品くれよ。そしたら」

「嫌よ」

即答。

「言うと思った」

コナンは思わず笑った。

大体彼はその試作品をまた手にすることを期待してなかった。もう、彼女がああ薬をくれるとも思ってたなかった。

クッキーをほおばりながら、つんとした表情の哀を見て思わず苦笑い。それから温かいミルクをそろそろと喉の奥にゆっくり流し込む。体がぽかぽかと温まってくる。

甘くて優しい味がした。

「美味かったよ、サンキュ」

彼は全てをゆっくり味わった後、空になった皿を彼女に渡した。それを受け取りながら哀はふっと口元に笑みを浮かばせ、

「こちらこそ、ありがとう。小学生を演じるには必要なアイテム

を」

「・・・何か引つかかるんだよな、そのセリフ」

コナンは思わず首をかしげた。それからひょいっと玄関の縁石から降りると、

「じゃあな。・・・マスクありがとな。風邪ひかねえように、厚着して寝ろよ」

「子供じゃないんだから大丈夫よ。あなたこそ、油断して警察に補導されないようにね」

コナンはその言葉に、ははは、と思わず苦笑する。本当に洒落にならないだから。彼はポケットにマスク型変声機があることを確認すると、

「それじゃまた明日な」  
と笑顔で言った。

「おやすみなさい・・・」

哀が答える。

「本当にありがとな・・・」

コナンはそう言う、小さくじゃあ、と呟いて阿笠邸をあとにする。それから全速力で夜道を駆けていった。一度も振り返ることなく。

みるみるうちに小さくなるその後姿を見て、哀はふうと小さくため息をつく。

少し寂しさ、切なさを帯びたその表情で。

それからそつと白いウサギの耳当てをつけてみた。

「・・・あつたかい」

彼女はポツリと呟いた。

## ヘッドー１（後書き）

。

## エピソード2 (1) (前書き)

この話は新作書き下ろしです。快書です。かなりドキドキしています。感想お待ちしております。

## エピソード2 (1)

その美しすぎる満天の星空を、その少年はヘリコプターの中で見ていた。

頭には白いシルクハット。瞳にはアンティークなモノクル。白い手袋に、マントにタキシード。すべてを白で固めたその少年は、そんな自分が窓ガラスに映って思わず悲しく微笑んだ。

もうすぐ時刻は「クリスマス・イブ」から「クリスマス」に変わるというのに。

機内には自分と、そして自分を「ぼっちゃん」と慕う老人と。

これを愛しい彼女と眺めることができれば。

片眼鏡越しに一人空を見上げる彼女の<sup>モノクル</sup>ことを考える。

そう、先ほど出会ったあの、名探偵の大切な人のように。

「・・・ぼっちゃん？」

運転席から心配そうにその老人が尋ねた。口数がいつもより少ないので心配になったのだろう。

「・・・なあ、ジイちゃん。今日の仕事、どう思う？」

「どう、とは？」

「何パーセントの出来、かな？」

「・・・ぼっちゃんらしくありませんな。そんな後ろを振り返ることをして」

真正面を見据えたまま、安全運転を続けたまま、老人は少しだけ首を傾げた。皮肉を言っているのではなく、本当にわからない、といった様子で。

「・・・いいから答えて」

「・・・それじゃあ僭越ながら言わせてもらいますが。今日のぼ

「つちやまの、出来具合は……65パーセント、ですな」

「……ハッ。……ジイちゃんにしてはずいぶん辛口だな」

思わず鼻で笑うしかなくて、その白い衣装を身に纏った若い男は目線を運転席に座っているそのジイちゃんと呼ばれた男を見た。

「んで、その理由は？」

「あの美術館であなたが起こした行動としては、95パーセント以上の出来だとは思いますが。その華麗な仕事振りには天国にいるお父様もきつとお空の上から目を見張られていることでしょう」

「……天国ね……」

本当に黒羽盗一は天国にいられているのか。何の理由か多くの宝石を盗み、人を騙し、息子を騙し。それが正当な理由があったにしろ、……盗みという罪を犯した。これだけは変わらない。犯罪に手を染めているのは変わらないのだ。

そして自分も。

白い装束はすでに親子2代に渡る罪の色に染まっている。

「ぼつちやま？何を考えているんです？」

心底心配そうに運転席のその老人は若い男に尋ねた。否、彼にはわかつていたのだらう。だからその考えを止めるためにその言葉を投げかけたのだ。そう若い男は解釈した。

「いや。……んで？何でそれが65パーセントになるんだ？」

わざと陽気に高らかに声を上げると、老人はふっと小さく笑った。

「わかりきったことです。……あなた様の鳩がどんな遠くまで行っても寄り道せず自分の巣に戻ってくることを躰けたのは一体、何方と何方でしたかな」

暫しの間のあと、その若い男は、僅かにその頬を引きつらせる。

「寄り道はいけません」

何もかも悟ったようなその言い方。そんな彼に対して、若い男は、



「まったくジイちゃんにはかなわねーな」と呟いた。

「・・・けど、もう少し持ち上げてくれてもいいんじゃないか？」

「私は何時なるときも、レディの味方ですから」

そう、彼の名は。

今、世間を賑わせている、華麗なマジックで人々を惑わす紳士的な怪盗。

決して人を傷つけない。決して人を侮らない。

そう、彼の名は。

怪盗キッド。

しかし、それは仮の姿であつて。彼の本来の姿は普通の男子高校生、黒羽快斗。

それを知っているのはごく限られた人しかいないのだけれど。

「23時49分、か」

キッドは腕に嵌めた、その服装に見合ったアンティークな腕時計で時間を確認し、小さく嘆息した。

全ては自分の軽率な行動によって起こったこと。思わぬアクシデントが重なり、それで時間がどんどん加算されていった。予定では22時を半分ほど過ぎたくらいの時刻でもとの姿に戻って彼女の前に再び現れることができるはずだったのに。

ファンファンと遠くでヘリコプターを追うその音を聞きながら、彼は遠い目を浮かべた。キッドではなく、黒羽快斗として。

今年は恵子の家で行われたクリスマスパーティー。誘われたみんなが料理やお菓子を持ち寄ってできたアットホーム的なパーティーで。それは前々から企画されていたことであつたが、それ以前に今日の仕事は計画されていた。

クリスマスイブ、クリスマス、のこの2日間しか置かれてないその宝石「祈りの女神」をどうしてもこの目で見て確かめたかった。パーティーに少しでも参加して、クリスマスに彼女と過ごせばそれでいいと思っていた。

けれど。

『あの中森さん、さびしそうでしたわよ』  
先ほどの言葉が耳につく。

自分と幼馴染である青子は、あの工藤新一と毛利蘭のように、何ヶ月も会っていない仲ではない。けれど、少しでも一緒にいたい関係に自分と彼女はいて、それを素直に表現できない。

クリスマスパーティーを終え、一人家に戻り、あの少女のように誰もいない家で。空っぽの家で、暖房の効いてない寒い部屋で空を見

上げているのだろう。自分を思つて。  
あの少女と、青子の姿がリンクして。

「くそっ……」

そのとき。

ズズズというバイブレーションにはつとずる。

いつも自分の証拠を残すこれだけは自宅に置いておこうと一度は  
思ふのだが、なぜか離すことができてなくて。すぐにでも彼女と連絡  
がとりたい。そうどこかで思っているからかもしれないけれど。

表示は、やっぱり中森青子。大切な幼馴染からだ。

「………よお」

「青子だよ。……今、どこにいるかわかる？」

「え？……おまつ、こんな夜中にまさか外出してんのかっ！？  
もうすぐ12時だぜ？！」

思わず電話を握り締め、彼は素っ頓狂な声を出してしまった。  
若い女の子が、こんな夜更けに。いったいどんな悪い男おおかみがいるか  
わからないというのに。

「うん、だつて……。キッドのせいでまだお父さん帰ってこな  
いし」

「だつたら……。早く寝ろよ！」

「だつて……。快斗、恵子のパーティにいたはずなのに、いつの  
間にかいなくなっちゃって、こんな時間まで帰ってこなくて。電話  
もなくて……」

すすり泣くその声に、胸が軋む。

「ったく。俺も人のこと心配する前に自分のことやれっつーの」  
「・・・え？」

ひつく、ひつくとすすり声をあげながら、青子は聞き返す。しかし、そんな彼女に対して、いや、こっちのことだ、と小さく呟いた。

「・・・動くなよ？」  
「え？」

「お前がクリスマスに行きそうな場所くらい、見当ついてんだから・・・待ってるよ、すぐ行ってやっから。ジングルベルの鐘が街中響き渡る前にな」

暫しの間の後、電話口で青子が小さく笑う声が聞こえた。

「何かキッドみたいで感じ悪いよ」  
「何だそら」

むすつとして答えると、青子はその反応にカラカラと笑った。

「・・・けど、快斗の方が全然かっこいいよ。・・・青子を見つけてくれたらね」

「・・・見つけてやるよ、今すぐにな」

キッドはそう呟き、電話を切るや否や、ヘリコプターから、イルミネーション見える街に向けて、大きくダイブした。

大切な、  
中森青子<sup>おたから</sup>が居る<sup>あ</sup>、  
その場所へ。

## エピソード2 (2)

「待ってるよ、青子。・・・すぐ迎えに行つてやつから」

・・・もう、一人にはさせない。

ヘリコプターから東京のイルミネーション輝く街に向けてダイブする。

降下していくからだを襲うのは、凍てつくような冷気を纏った風。頬をびゅんびゅん叩き付けるが一度も動じることもなく。

バッ

パラグライダーを<sup>おたから</sup>広げ、そこで自由に風をものにする。  
いざ向かうは青子が待つ、あの場所へ。

彼が降り立ったのはとある古びた惣菜屋の裏。

米花市の隣にある、そう、彼ら・・・ 黒羽快斗と、中森青子  
が通う高校のすぐ近く。その店のすぐ後ろの草むらに体を隠し、

白のシルクハット、タキシード、手袋、モノクル。すべてを一瞬にして解いて、一人の『黒羽快斗』に戻る。

そして、目の前に残るは白いハンググライダー。それをずっとその形のまま、持っているわけにはいかない。けれども、そこに置いていて誰かに見つかるわけにもいけない。

落ち葉に埋もれさせるわけでもない。だけど、決して見つからないようにちよつとしたマジックをかけて。

そこに現れたのは、一台の自転車。白ではなく、赤の自転車。彼はそれを見て、ふつと小さく笑みを浮かべた。そしてサドルに座るとペダルに足をかけ、最初の一漕ぎをするために、足に力を入れた。

+++

彼はその場所に向けて自転車のペダルを漕ぎ続けていた。

空から降りてきたときの風の冷たさとはまた違う感覚で、その冷気は自分の頬に体当たりしてくる。手袋なしのハンドルを持つその手は凍てつくように冷たい。

けれど、前に進むしかなかった。そこに、自分を待つ彼女がいるのだから。

雪が降る前に、クリスマスイブが『イブ』ではなくなる前に。

彼女に会いたかった。



そして。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱり」

自転車を止め、彼はほっと安堵の息をつく。そのとたん、白い息が辺りにぱっと立ち込め、一瞬だけ目の前にいる人物の顔を霞めた。江古田市にある、明かりどころか人気もない、尚且つ工事用具がそのまま置かれていたその大聖堂の廃屋の前で、手袋を頬にあて、寒さを凌ごうしているその姿。

そこにいるのは、『幼馴染』であり、自分にとってはそれ以上の存在である、彼女。中森青子。

白いダッフルコートを身を纏っているが、それでも寒さは凌ぐことができないらしく、時々ぴょんぴょんと飛び跳ねたり、あっちへ行ったり、こっちへ来たり。

そんな落ち着かない彼女に、快斗は思わずぶつと噴出した。

「・・・・・・・・？つ・・・・あ！」

その声の方に視線を向け、ようやく彼の存在に気づいた青子思わず声を上げる。

「快斗・・・・」

「よつ・・・・遅くなっちまった・・・・悪かったな」

わざとおどけた表情をして、彼女の前に立つと、すぐに青子にはっこり微笑んだ。

「・・・・・・・・やっぱり、来てくれた」

その無邪気な笑顔にようやくすべてを悟る。

ああ、自分は何もかも間違っていたんだ、と。

## エピソード2 (2) (後書き)

間に合いそうです。この話。わーい、皆さんメリークリスマスー  
v  
v

## エピソード2 (3) (前書き)

あたし、キリスト教の学校に2年ばかり通ってました。いや、洗礼を受けているわけでもなく。

なのでちょっと間違ってるよ、って思っても目を瞑ってください・・・

>  
<

## エピソード2 (3)

約束なんて、無効になることもあるだろう。

とある事情によって、適わないことだってあるはず。

二人が願っていてもどうしようもない事情によってできなくなる  
ことだって。

でも、自分には理解<sup>わか</sup>っていた。

彼女がまたこの場所にあらわれることを。

だって・・・。

+++

それは去年のイブの日。

青子の家で行われた初めてのクリスマスパーティ。

客人たちが帰ったあと、快斗と青子はほんの少しだけ二人だけの  
クリスマスイブの時間を過ごした。

それは、酔っ払った彼女の父親を引き取りに、江古田駅に行くだ  
けの道だったけれど。

寒さ凍える夜道を二人はのんびり歩きながら、二人は特別な夜を感じ  
ていた。

いつもと同じ道のりも、青・白・ピンク・黄色。色とりどりのイ  
ルミネーション・ライトに照らされ、キラキラ輝いていて。

「綺麗、綺麗」とまるで幼い子供のように騒いでいた青子に、い  
つもの憎まれ口を叩きながら、そうやってその道を歩いていた。

そして、  
そこで2人はあの場所にたどり着いた。学校の近

くの、その教会に。

いつもは決して門が開かないその教会に。

『快斗っ！見て、この教会、入れるみたいだよー・・・っ』

興味津々というように青子は快斗のダウンジャケットの裾をくいくいと引つ張った。

『そりゃクリスマスだかな・・・』

普段、平日は素通りしてしまうその教会。けれど、クリスマスという言葉は人の心情を動かしてしまうらしく。

『お気軽にどうぞー、だつてえ。快斗入ろう？』

強引に引つ張るその彼女の気持ちに負け、そのまま教会の中に引き摺り込まれた。

重い扉の向こうには2人が今まで見たことのない世界。天井には絵が描かれ、そこには天使が舞い、羊がいて、羊飼いがいて。学者がいて・・・そして真ん中に立つのは、マリアとヨセフ。そして抱かれているのは、小さな赤ちゃん。・・・そう、キリスト誕生が描かれたその天井画。

アンティークなライトにとても大きなパイプオルガン。

何もかもが新鮮で、青子は目を爛々と輝かせて。キャンドルに囲まれたその部屋の中で何度も「すごい、すごい！」と叫んでいた。

その迫力に、思わず気圧されて、「早く帰るぞ！」なんてその細い手首を掴んだそのときだった。

『・・・ようこそ。・・・いらっしやい』

気配もなく。その声が聞こえるから、快斗はぎよつとして青子の前に腕を翳して守りながら振り返った。そこにいるのは、60歳ほどの恰幅がいい異国の牧師であり、そしてその隣には30歳くらいの日本女性。親子とも見えるそのカップルが自分たちに向けて人の

好さそうな顔でにこやかに笑っていた。

その笑顔に、そのいるだけで温かい雰囲気<sup>おほ</sup>に、すぐに警戒心は溶けてしまう。

『礼拝も終わった後でもう誰も居ないけれどゆつくりしていきなさい。ここにきてくれたのは、きつと神の思<sup>おも</sup>し召<sup>め</sup>しなのですから』  
そう言っただけで出されたのは暖かいミルクと、小さな籠に入った一口サイズの紅茶のケーキ。もう時刻は10時過ぎだというのに、一向も閉める気配もなく。来る客も拒まず、静かに笑って迎えてくれる。

『ここはわれらが主<sup>しゅ</sup>イエス様が生まれる日を祝うために夜通し、明けておくのです。いつ誰がここにきて私たちとお祈りしていただいてもよいように。あの日、羊飼いや学者、森の動物たちに見守られながら、馬小屋で神のご加護によって生誕されたように……。・・だからいつでも来ていただいてよろしいですよ』

そう温和な笑みを浮かべて言った牧師。

来年も行こう。来年は、イブがイブでなくなるまで、そこで過ごす。

そう2人は約束して、その牧師夫婦と別れた。

けれど……。

今年の5月、牧師夫婦は海外へ出かけようとしたその矢先  
空港へ向かうその車の中で、命を失った。  
わき見運転の玉突き事故に巻き込まれて。

彼ら夫婦と親しかった牧師が、その教会で葬儀を開いたとき、ミサの曲が流れたとき、青子は快斗の胸の中で号泣した。

1度しか出会わなかったのに。

話したのはほんの15分も満たなかった程だったのに。

こんなに胸が締め付けられるのはなぜだろう。

『もう、行けなくなっちゃったね』

すべてを終え、2つの棺が墓に運ばれるその様子を遠目で眺め、

青子は鼻を嚙りながらぼそり、と呟いた。そんな彼女の肩を、居た堪れなくなつて、快斗はそつと抱いたのだつた。

あれから数ヶ月たった今。

貰い手も見つからないその教会は1月には取り壊される、そうどこかで聞いた。

けれど、青子には言わないようにした。またその小さい胸を痛ませるには忍びなかったから。

あれ以来この教会の話は極力避けていたし、通ridoも変えていた。12月になつてもパーティの話はしてもこの教会の話は一言も出なかった。もちろん、青子の口からも。

なのに。

彼女が現在<sup>いま</sup>ここにいるとわかつたのは・・・。

きつと彼女が優しすぎるから。繊細すぎるから。そしてあの牧師夫婦があまりに暖かすぎたから。



忘れられない、人だったから。

誰もいなくなったこの場所で、きっと一人空を見上げてる。

黒羽<sup>オレ</sup>快斗のことじゃない、もちろん、キリストのことでもない。  
あの心優しい牧師夫婦のことを祈って。

そう思えたんだ。

## エピソード2 (4)

「忘れちゃったのかと思ったよ」

一人あの日の追憶に浸っている快斗の横で、緑の布で多い尽くされたその大聖堂の前に立ち、青子は苦笑ともはにかみとも取れる笑いを見せた。

「あんまり悲しくて、泣いちゃった」

それが電話の向こうのあの涙の理由か、と、思わず脱力する。

「バー口、忘れるわけねーだろ？」

ただ、避けてたから。

ここに二人でまた来ることは。

あの二人を思い出すのは、青子の涙を見るのが辛すぎるから。おまえ

そう、弱いのは自分。

逃げることなんて誰より嫌いなはずの自分オレが、一番逃げていた。

そして、誤解していた。あの二人と同じように、クリスマスイブに会えない自分のことを思っ  
て泣いている、そう思っていたのに。全然それは間違っ  
ていて。

「見直したよ。・・・強かったんだな、意外と」

快斗がそんな憎まれ口をひとつ叩くと、青子は小さくため息をついてみせた。そして、笑顔を作る。

「・・・強くないよ。・・・ただ、すべてが壊されるその前に。・・・青子は、あの牧師さんたちにもう一度ここで会いたかったの。・・・サヨナラを言いたかったの」

ぐすん、と鼻を少しすすると、青子は潤んだ瞳を隠そうとするかのように空を見上げた。

そんな彼女を思わず片手で引き寄せ、自分の胸に押し付けた。

今、目の前の優しい彼女がすごくいとおしくて。

そして、そんな大切な彼女を泣かせた牧師夫婦を少し恨めしい。

「ちよつと、何、快斗！くるしつ・・・やめてよー！！」

じたばたする青子に、それでも離そうとはしなかった。

叶うなら一度だけでいいから、またあの夫婦に逢いたい。

ゆつくり青子と話をさせてやりたい。

神というものが本当にいるとするならば、神に忠誠を誓った夫婦と天国なら連絡が取れたりもするんじゃないだろうか、なんて子供じみた考えも浮かんでしまふ。

「・・・ね、離して。・・・快斗」

そつと青子が頼むから、ようやく快斗は彼女を抱きしめる手を緩めた。

青子はそつと快斗の腕の中から抜け出すと、鞆の中からいそいそと水筒とタッパを出して。タッパを開けると、一口サイズの紅茶のケーキ。旨そう、と手を伸ばしかけた快斗に、青子はやんわりと「だめ」と言った。

「・・・快斗にあげるんじゃないよ？2人に。・・・そして、同じようにここに来てくれた人あげるの。・・・牧師さんの奥さんが作ってくれたケーキには足元にも及ばないだろうけど」

「・・・家帰ったら俺の分もあるんだろうな？」

口を尖らす快斗に対して、「もちろん」と優しく微笑む。いつもと違う大人びた青子に対して、快斗は思わず惚けてしまふ。

自分の知らないところで、青子は確実に成長していた。それが嬉しくもあり、寂しくもあり。・・・なんて父親みたいな

ことを言ってみるけれど。

リンゴーン、リンゴーン……。

二人の思い出の時計塔が午前0時を告げる。

この聖堂で初めて過ごす25日の日。そしてそれは終わりにもなる。

25日の中に入って迎えることはなかったし、その夫婦と迎えることも決してなかったのだけでも。

ただ、それでも2人はとても満足していて。こうして、ここに2人でいられたことに。同じ思いでいられたことに。

きつと天国のどこかで自分たちを見守ってくれると思うから。

青子の作った紅茶のケーキを食べてくれると思うから。だから

「メリークリスマス」

快斗は2人の冥福を祈りながらほんのすこしだけ私情もお祈りする。

また来年も青子と過ごせますように。そして関係がすこしだけ進歩していきますように。

そしてその願いは、きつと・・・。

## エピソード2 (4) (後書き)

これにて、聖なるはお話終わりですー。  
ありがとうございました。

とりあえず、あたしも、イブ中に終わることができてよかったです。  
今日は素敵なイブを、大切な人と過ごすことができましたか？

明日も貴方にとって、素敵な日でありますように。  
メリークリスマス！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2403b/>

---

聖なる夜は君と・・・

2010年11月14日14時27分発行